

アジア女性基金公開フォーラムの記録

**「だから、戦争」の論理と心理**  
～女性、国民、アジアの視点から～

2004年3月4日18:30～21:20  
主婦会館プラザエフ（東京・四ツ谷）

パネリスト

上野 千鶴子

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授

加藤 陽子

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授

姜 尚 中

東京大学社会情報研究所教授

主催

財団法人女性のためのアジア平和国民基金  
(アジア女性基金)

後援

外務省



戦後50周年をまたいでアジア女性基金は設立され、「慰安婦」とされた方々に対する償いの事業の実施に入った。それは、「国家と戦争・暴力と女性」の課題に向き合うことでもあった。「慰安婦」問題への政府と国民の謝罪、償いとともに、二度とこのような問題を繰り返さない決意を政府は公表した。

なぜ戦争にいたり、軍・官憲が軍「慰安所」設置に関わったか——。「あたらしい戦争」がいわれるとき、このフォーラムは、「なぜ戦争なのか」「国家と戦争と女性、国民、アジア」の主題を設定して開いた。

(宣伝ちらし文から)

——武力、暴力による強圧と支配、その論理や正当性を「国」や他人にあずけてしまうとき、なにが起きたか。繰り返された戦争の記憶とその論理・心理を明らかにし、「戦争と歴史」「安全と共同性」「国家と個人」を考えていきたい。

このフォーラムでは、「戦争に踏み出す瞬間を支える論理がどのようなものであったのか」を追究する加藤陽子助教授と、「国民国家」「女性の国民化」の歴史に批判的に問いかける上野千鶴子教授、ナショナリズム、グローバリズム、国家の前面化に対する発言をつづける姜尚中教授が討論する。

(この記録は、パネリストにテキストをみていただき、アジア女性基金で最終稿としたものです。)

## パネリスト

### 上野 千鶴子 UENO, Chizuko

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授  
社会学専攻。専門はジェンダー&セクシュアリティ研究およびフェミニズム理論。

1948年富山生まれ。京都大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程修了。京都精華大学助教授などを経て現職。

著書：『家父長制と資本制』岩波書店、1990；『近代家族の成立と終焉』岩波書店、1994；『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998；『発情装置』筑摩書房、1998年；『差異の政治学』岩波書店、2002；『当事者主権』（中西正司と共著）岩波新書、2003；『上野千鶴子が文学を社会学する』、朝日文庫、2003；『文学史を読みかえる7 リブという〈革命〉』加納実紀代編、インパクト出版会、2003；『戦争が遺したもの 鶴見俊輔に戦後世代が聞く』（鶴見俊輔、小熊英二と共著）新曜社、2004

### 加藤 陽子 KATO, Yoko

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授  
日本文化研究専攻、日本史学講座。専門は1930年代の内政と日米戦争史、戦争論。

1960年埼玉生まれ。東京大学文学部国史学専修課程、大学院人文科学研究科博士課程修了。山梨大学などを経て現職。戸籍名・野島陽子。

著書：『模索する一九三〇年代 日米関係と陸軍中堅層』山川出版社、1993；『徴兵制と近代日本 1868-1945』吉川弘文館、1996；『戦争の日本近現代史 征韓論から太平洋戦争まで』講談社現代新書、2002

## 姜 尚 中 KANG, Sang-Jung

東京大学社会情報研究所(現・情報学環)教授

専門は情報科学、情報システム学、政治学・政治思想史。

1950年熊本生まれ。早稲田大学政経学部・大学院博士課程修了。明治学院大学、国際基督教大学を経て現職。

著書：『ふたつの戦後と日本』三一書房、1995；『ナショナリズム』岩波書店、2001；『反ナショナリズム』教育史料出版会、2003；『ナショナリズムの克服』（森巢博と共著）集英社新書、2002；『日朝関係の克服』集英社新書、2003；『挑発する知』（宮台真司との共著）、双風社、2003；『在日』講談社、2004



主婦会館ブラザエフ・第1会場



主婦会館プラザエフ・第1会場



姜尚中さん



上野千鶴子さん、加藤陽子さん

# 第1部

——提起——

姜 尚 中  
加藤 陽子  
上野 千鶴子

「基金」山崎（進行） 本日は大変お忙しいなか、お集まりいただきましてどうもありがとうございます。ただいまよりフォーラム『「だから、戦争」の論理と心理～女性、国民、アジアの視点から』を開会いたします。

きょうは定員を大きく上回り300名を超える予約のお申し込みをいただきました。一部のお客さまには4階の別室でモニターを通してごらんいただいております。お手元にお配りしております質問用紙は、第1部のあとの休憩時間に、係の者にお渡しいただきたいと思っております。ご質問につきましては、第2部のなかで各先生方のお話のなかに入れていただくこともございます。それからアンケートもお配りしておりますので、ご記入のうえお帰りの際にお出してください。

でははじめに、主催者であります財団法人女性のためのアジア平和国民基金より専務理事兼事務局長の伊勢桃代がご挨拶を申し上げます。

## 歴史を検証、「国家と個人」を考えたい

伊勢桃代 アジア女性基金の伊勢と申します。本日はこのように大勢の方にお越しいたぎまして感謝しております。当初想定いたしました数をずっと超えまして、こうして大きな集会になったという理由は、何よりもきょうの3人のパネリストの先生方のお考えを、じかにうかがいたいという皆さんの強いお気持ちがあったためだと思います。私どももそういうお気持ちに応えるために会場を探しましたのですけれども、残念ながら会場が2つに分かれることになってしまいまして、本当に申し訳ございません。

きょうのテーマといたしましては、戦争と歴史、そして共同体と安全、国家と個人など、今日の日本にとり重要な課題をとりあげております。

アジア女性基金は「慰安婦」の方々への償い事業を行ってまいりました。50年以上前に起こった残酷な行為が大きく国家レベルで取り上げられるようになったのは、被害者自身の訴えと被害者、そして女性の立場、視点から当時の状況が見直されたということにあったと思っております。歴史を、違う立場から、そしてまた女性の立場から再検証することの重要性を私たちは再認識いたしました。日本も含め世界中の近現代、戦争の歴史のなかで、国家と個人、国家として権力を握っている人と国民、個人との関係については多くの問題、疑問、反省を抱えております。

このことに関する考察は今後の世界を考えるうえで、ますます緊迫した

重要な課題になってまいりと思います。福沢諭吉が、日本には「政府ありて国民なし」と100年以上も前に嘆かれた当時の状態から、日本は変わり得たのでしょうか。また、福沢諭吉の「政治は社会を変えるのではなく、社会が政治を変えるのだ」という主張をどういうふう to 実現するかなど、本日の先生方には大いに討議をしていただくことを期待して、ごあいさつとさせていただきます。

付け加えさせていただきますと、きょうお配りいたしましたこのプログラムに、私どもの公開フォーラム「歴史と対話シリーズ」について書いております。今回はその4回目ということになります。アジア女性基金や「慰安婦」問題にはいろいろな見方がございますけれども、対話をして、話し合いをしていろいろと考えていくことが本当に大事だと思いますので、こういうシリーズをつくり、続けてまいりました。きょうはご参会ありがとうございます。(拍手)

「基金」山崎　それでは、これより第1部を始めさせていただきます。3名のパネリストの方々をご紹介します。向かって左が、上野千鶴子さんです。東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授でいらっしゃいます。真ん中は、同じく東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助教授でいらっしゃる加藤陽子さんです。そして、向かって右が姜尚中さんです。東京大学社会情報研究所教授でいらっしゃいます。

第1部では3名のパネリストの皆さまにそれぞれ20分ほどでお話いただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。では、最初に姜尚中さんからお話しさせていただきます。

## 提起——姜尚中

### 「基金」、絶対的断絶ではない

姜尚中　話をする前に少し個人的な見解についてちょっとお話ししたいことがあります。私自身はここに出ることについて、ある意味ではいろいろ逡巡もしました。出るべきかあるいは断るべきか、いろいろ考えた末にお引き受けいたしました。

私自身は、「国民基金」ということについてコミットをしませんでした。「論座」(注)という雑誌で、上野さんのほうから、「ないよりはましなのか、あるいはないほうがましなのか」という、歴史的な評価について非常にシビアなご意見があった。それを見たうえで、私自身は、やっぱりこれは歴史的には厳しい評価を、おそらくは甘んじて受けなければならない、そういう現実があるのではないかと私自身は認識しています。

ただ、その「国民基金」とそれにいわば反対する側とのあいだに、本当に絶対的な断絶があるのかどうか。そのことについて私自身は非常に懐疑的でした。したがって、「国民基金」にいわば反対している主要な団体にも私自身はコミットしませんでした。それは私自身がニュートラルコーナー、中立的な立場でいられるかということ、そうではないと思います。やはりこの問題については中立的な立場はあり得ない、何らかのかたちの選択を迫られることだと思えます。にもかかわらず、私自身はきょうのこういう場において——いま実際、いわばわれわれはある意味においては戦時下にあるわけですね。現実的にそういう状態がイラクをめぐる非常に重大な決定を日本の国民や、さらには韓国の3000人の武装兵力を出すということですから、非常に重大な選択をせざるを得ない、そういう状況にあることもまた事実です。そういう問題について自由に意見を述べてほしいということでしたので、私はこの場をかりて自分の考え方を述べたいという、そういうつもりでここにまいりました。

### 「グラウンド・ゼロ」と「アフガン・零年」

きょうのシンポジウムのテーマというのは、やっぱり戦争という問題にかかっていると思います。その場合に私は、基本的にはどの立場に立って

(注)「論座」——月刊誌・2004年2月号、朝日新聞社

戦争というものを見るのかということとは非常に重要な視点だと思いますね。最近になりましてアフガンのセディク・バルマクという監督がつくった「アフガン零年」という、近々日本でも公開される映画ですけれども、それを観て少し何か書いてくれと言われまして、あるつたない文章を書きました。この物語は、マリナという主人公の女性——アフガニスタンで実際に5歳のときからストリート・チルドレンとして生きてきた女性ですけれども、その少女を主人公に使って、本来監督の意図としては最終的には虹を越えるというか、虹をくぐり抜ける、これは明らかに自由と希望の解放というかたちで、本当のタイトルは「虹」だったそうです。この撮影をしながら、結局この女の子が最初から最後までずっと泣いている、それを撮りつつこの監督はアフガニスタンにはやっぱり希望がない、それをそっくりそのまま自分は受け入れるべきではないかということで「アフガン零年」と変えたと聞いております。

私自身は「グラウンド・ゼロ」というのと「アフガン・零年」というのはどう関わるのだろうかということ、まず一つの問題提起として出したのです。それはやはり私はナイン・イレブン——「9・11」の同時多発テロ(注)があったときに、それからやがてアフガン戦争が始まり、そしてイラク戦争へとつながっていったわけですけれども、そこで一つ感じたこと、おそらくこれはきょうのテーマの一つになると思いますが、私たちにとっていわばこの世界というものがどんなに非対称的な世界なのか、目がくらむほどの非対称的な世界なのか、私たち自身がやっぱり虚をつかれているように思ったのは、アフガニスタンについてほとんど何も知らないということです。

これは意外と19世紀にエンゲルスがアフガニスタンについて詳しい論文を書いているのですけれども、ほとんど私はアフガニスタンについて、カブールという首都があるということぐらいは知っておりましたけれども、知らなかった。それで1979年に旧ソビエトとアフガニスタンの、まあある種の旧ソビエトの抱えたベトナム戦争だったわけですけれども、20数年にわたる内戦に生きてきた。その地というのはわれわれが知っているニューヨークと比べるとあまりにも落差が激しくて、言ってみれば「絶対的な無」に等しいような地域だったわけですね。なぜそこにあれほどの巨大な軍事力をもった国が、あれほどの膨大な攻撃をやらなければならな

(注) 9・11アメリカ同時多発テロ——2001年9月11日、アメリカ中枢の建物に対して乗っ取った旅客機を突入させた攻撃で約3000人の犠牲者を出したテロ事件。アメリカは実行犯をアフガニスタンの「タリバン」とした。のちに破壊されたニューヨークの世界貿易センタービル跡を「グラウンド・ゼロ」と命名。

かったのか。これをすでにわれわれは忘れていたわけですが、その意味というのが、私自身、いまもってまだよくわからないわけです。

タリバンというのが何であるのか。もちろんこの映画のなかでもある種タリバン政権下のこの少女の問題というのが非常によく表れていまして、彼女自身が自分の人生を台なしにしたのは誰なんだということを何度でも問いかけていくわけですね。これはやはり少女と女性の立場からこの戦争に対する、戦争というよりはアフガニスタンの一つの大きな問題点を告発しているわけです。日本に住んでいれば、あるいは韓国に住んでもそうだと思うのですが、やはり私たちは自分たちが日常的に接しているメディアはやはりニューヨークなわけですね。これはおそらく絶対的な情報量、そして絶対的な知識においてもこの非対称性というのは抜けがたく存在している、そういうことを改めて私自身は感じました。そしてこの問題を、戦争を考えていくときにはどういうふうに考えていったらいいのか。つまり絶対的な非対称性ということがこの世界にどのような残酷な事態をもたらすかということの一つを考えなければならぬということですね。

そして2番目はその問題と関わるわけですが、私はアフガン戦争(注)も、そして現在のイラク戦争(注)もこれは正確に言えば戦争ではないと思います。やはり戦争である以上、その自分たちが戦っている敵というものが、一応これはパブリック・エニミーになる、公的になるわけです。けれども、このアフガン戦争においては、また現在のイラク戦争もそうですが、いわば戦争の相手側の当事者というのは、これは戦争というカテゴリーでくくられる敵ではなくて、言ってみれば社会的害虫なわけですね。むしろ国内的な犯罪予防がそのまま延長して当てはまるわけです。だからタリバンであれ、あるいはバース党のサダム・フセインであれ、これは社会的害虫として駆除するということです。

したがって、これは明らかに何か国家の主権の発動として戦争があるというよりは、いわば犯罪者を警察的な権力によってせん滅するというのに近いイメージが湧いてくるわけです。つまり警察的な権力と軍事的な権力との境目がほとんどよくわからない。これは国際法学者に言わせれば、たぶんイラク戦争の正当性というのではないと思うんです。(2003年)5月の時点でブッシュ大統領は戦争を終結したと言いましたけれども、いったい誰が終結という事態について一方的にその戦争の終結を宣言し、そして問

(注) **アフガン戦争**——9・11後、アメリカがタリバン政権「アフガニスタン」に対して2001年10月7日開始した軍事攻撃。

(注) **イラク戦争**——アメリカがフセイン政権「イラク」に対し2003年3月30日開始した軍事攻撃。

題は終わったと一方的に宣告できるのか。つまり誰が犯罪者であり、誰がせん滅すべき相手であり、そして一方的に戦争のいわば当事者を抜きにして終結宣言ができるという、非常にこれもまた非対称的な関係になっているわけですね。こういうような戦争については、これは旧ナチスの御用学者とも言われた、ある意味、憲法学者が1950年の朝鮮戦争のときに言ったような、いわば軍事的手段の高度化は逆説的にも他者をいわば害虫としてせん滅する、つまりそこには交渉もなければあるいは条約締結もなく、一方的にいわばせん滅する対象がなくなったときに戦争が終結する——これは、やはり私は、近代以来の戦争概念というのを成り立たないほどの一方的、かつ非対称的な、これは戦争と言えるかどうかわかりませんが、そういうものだったと思います。

そして3番目に申し上げておきたいことは、私は5月以降も実は戦闘状態が続いていると考えてきましたけれども、日本の政府もアメリカ合衆国も、これは戦争とはみなしていないわけですね。私は5月以降から明らかにこれは非正規戦、20世紀の戦争は、ある意味では非正規戦、特に日本の場合には満州事変から日中戦争にかけて、やがてこれは中国における非正規戦によって戦線が拡大し、やがて泥沼に入っていくわけです。ある意味においてベトナム戦争もそうでしたし、アルジェリア戦争もそうだったと思います。そして朝鮮民主主義人民共和国の建国の正当性も一応「遊撃隊国家」として抗日パルチザンを戦ったという一つの神話的なものをつくり上げて建国の理念にしたわけですが、基本的には非正規戦が5月以降イラクにおいて展開されているわけです。

これに対して私たちが、それをテロというかたちで置き換えて、問題がある一つのカテゴリーのなかに詰め込もうとしているわけですが、これは、私は明らかに非正規戦だと思いますね。つまり軍事的に絶対的な非対称性があるなかでは、通常戦力において戦えない場合に、非正規戦としての遊撃戦やパルチザンというものは有効性をもつということは歴史が実証していますし、同じような歴史の歯車のなかにアメリカ合衆国も踏み込もうとしている、というふうに私自身は去年の段階からいろんなところでものを書き、発言してきたつもりです。

## 「害虫駆除」のような非正規戦

つまり、この非正規戦という事態、これを国家間戦争と非正規戦という問題をどういうふうにわれわれは解釈していくべきなのか。ある意味において、日本のいわゆる「十五年戦争」はこの非正規戦に、言ってみれば手を焼き、そしてやがて泥沼の戦争へと入っていくわけですね。そしてやがて太平洋戦争へと突入していくわけですが、私はこの戦争には少なくとも国家は勝てないのではないかと思いますね。歴史的にそれがいろいろところで実証されています。したがって、この非正規戦においては戦争の終結ということの外交上の、いわば交渉というものが有り得ないということですね。そのような非常にアブノーマルな状態にいまイラク戦争というものが突入しようとしているということですね。

そういう事態のなかで、いわば国の、いわば暴力装置である武力というものを外側に出し、そこに介入する、それがたとえ人道的な復興であれ何であれ、それは明らかにやはり好むと好まざるとにかかわらず、そういうような非正規戦としてのいまのイラク戦争になんらかのかたちで巻き込まれるということは、私は避けられないのではないかというふうに考えてきましたし、その点においては日本以上に韓国の3000人規模の派兵という問題は、これは韓国政府と韓国の国民にとっても重大な決定だったと思います。その結果として日本の場合には、いうまでもなくこれは戦闘状態がないということですから、いわば実際に自衛隊員(注5)が亡くなっても、これは戦死者としては扱われないわけですね。実際の消防活動における不測の事態で亡くなった場合と同じ扱いを受けるということになっています。私はそれでいいのだろうか、そのような非常に小手先の、いわば法的なレトリックで、自衛隊を外側に出すということについて、私はもう少しいろいろな議論があっていいと思いましたし、また慎重であるべきではなかったのかというふうにいまでも思っています。

そして最後に、私自身がそういう問題についていろいろ考えたときに、私たちにとってそのせん滅すべき他者というのはいったい何なのかということ、もう少し冷静に考えてみるべきではないかということ。果たして私たちがテロリストというかたちでくくっている人々は、私たちがイメージしているようなそういう勢力であるのかどうか。この戦争とも言えない戦争においてテロリストとしてくくられることによって、それは私た

(注)自衛隊派遣——2003年12月26日、成田空港から自衛隊(空)先遣隊をイラクに向け派遣。以後陸上自衛隊もイラクに入る。

ちの理性の彼岸にある存在として結局せん滅していいという、そういうような考え方というもの、これは言うまでもなくパレスチナとイスラエルの場合に、もうすでに何十年も続いてきたわけです。ある意味において、これは世界的規模にわたるパレスチナとイスラエル紛争が世界に拡大しているような、そういうイメージとして私自身はイラク戦争というのが見えてくるわけです。

たぶんにそれと同じようなロジックが日本と北朝鮮の場合にも当てはまるのではないかと思います。これは国家ごと丸ごと、ある種、いわばアウトロー的な集団として見なされるわけですから、その国と交渉をもつということ自体について非常にネガティブな評価、この1年にわたって私自身もいろんなところでそういうようなりアクションを受けました。私たちはいわばそのような敵対的な関係や対立的な関係、そしてそこからエスカレートしてそれをせん滅すべきだという、それを私たちが納得してしまう、その根本にあるものは何かということをもう少しわれわれは考えてみなければいけないのではないかと思います。

これはいうまでもなく、アメリカ合衆国においてはそのロジックは非常に単純でした。それは二分法的に「こちら側とあちら側」、「文明と野蛮」になり、そして「民主主義と独裁」ということでした。少なくともそこでは非常に二分法的な言説がそっくりそのままメディアを通じて広範囲に広がっていきまし、またたぶんに日本においてもそうだったと思います。

北朝鮮について私が考えていることはあとで詳しく申しますが、私自身は基本的には現在の北朝鮮というのは、いわば日本のかつての自画像だと思います。やはり日本が総力戦として地上戦を戦わなかったということはよかったです。あのときに天皇が玉音放送を通じてあの宣言を出さなかったとするならば、もちろんそれについてはいろいろな問題があるとは思いますが、少なくとも天皇が総力戦を戦えという、そういう発言をしたとしたならば、日本の国民は、個々人はいいやいやながらも、おそらく地上戦を戦ったと思いますね。その結果、果たして戦後のような復興がこんなふうにより得たかと考えれば、それはなかったと思いますね。

## 北朝鮮はかつての日本の自画像

現在の北朝鮮においても事態は同じであって、つまり北朝鮮を最もよく

理解できるのは日本だと思うんです。日本こそまさしくかつて自分たちが戦後において否定していたその姿がはっきりと北朝鮮に表れているわけで、それに対してどう対応していくのかということは私もっと違うあり方が可能なのではないかと。しかしながら「9・11」以来、やはりその他者というものの区分けの仕方というものが、もう完全に非対称的になり、最終的にはそれはせん滅するしか方法がないというような、そういうような考え方というものが一部のなかであれ、やはり出ているということ。私はそのことに対して非常に危惧を覚えましたし、そういうものが国民のなかに広がっていくというそういう事態というものをわれわれはどう考えるべきなのか。これは非常にむずかしい問題ですけれども、やはりアイデンティティーに関わるような問題を今後われわれはどういうふうを考えていくべきなのか。

私たちにとってそういう他者とわれわれというような境界設定のあり方そのものを、もう1回少し考え直さなければいけないのではないかということの問題提起とし、私の問題意識について申し上げました。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

「基金」山崎　　どうもありがとうございました。続きまして加藤陽子さん、よろしく願いいたします。

## 提起——加藤 陽子

加藤陽子　歴史学者は貧乏性なのでレジユメ(p63参照)を用意してしまいました。固有名詞などで通りにくいようなところがあってはと思いましたが、それをご覧になりながらお聞きいただければと思います。「朝まで生テレビ」と違って、ゆっくり話してくださる姜さんの声にうっとりしていたら、あっという間に20分が経ってしまったので非常にあせっておりますが、お話ししていきます。

### 「いつか来た道」「忘れない」—戦争をとらえる言葉

まず私の『戦争の日本近現代史』を書いたときの気持ちからお話ししていきます。言葉として「いつか来た道」というのが、ある政党がよく選挙の前などに使っていたポスターにある文句ですね。あと、「二度と過ちは繰り返しません」という言葉もあります。そういう言葉を見ているときに、やはり私は、非常に苛立ちを覚えていました。つまり、「忘れないこと」とか「気づくこと」ということが、それほど有効なことなのだろうか。われわれの知能というものは、いつも「オオカミが来た」と脅されてないと、その脅されて反応することで戦争をとらえるしかないのかなと思える言葉に、いつも苛立ちを覚えていまして、特に日本というのはその本にも書きましたけれども、日清戦争以降10年ごとに戦争をやっているというのは、やっぱりちょっと戦争にすれっからの国であるというところがあります。ですから、それをやっていた戦前と、少なくとも1945年以降、今回のイラク派遣は違いますが、海外派兵を行っていない戦後で、これが同じ戦争というもので語れるのだろうか。実際それだけでも違うとことは見えるというふうに思ったわけですね。それが1点目でありました。

もう一つはドイツの近代が専門の政治学者であります山口定さんの『戦争責任・戦後責任』という本に書かれた文章を読んでいたときに、「ああ、この人はよくわかっている」と思った部分がありました。やはり起こり得る戦争の形態の変化、いま姜さんのお話にもございましたけれども、どれとどれが違って、どれとどれが新しいのかというような見方で過去を振り返らなければ、おそらく戦争の形態の変化を考えに入れなければ、「二度と過ちは繰り返かえさない」という誓いはおそらく実行できないだろうと書か

れています。そういう倫理主義的な見方もありました。それと、丸谷才一さんはいろいろ多才な方ですが、「朝日新聞」に『雁の便り』という、絶版になっておりますが、非常に面白い文芸時評を書かれていました。そのなかである戦争小説を批評しながら、戦争責任について容易に論ずれば、「誠実を装った干渉主義か、鈍感な愚かしさか、それとも威張り散らした居直りか」になってしまう、その3つのなかに落ちてしまうというようなことを言っています。いまのジャーナリズムの状況はどちらかということその1番目と3番目になるのでしょうか。居直りか誠実を装った干渉主義かというあたりになるのではないかと思います。

そこで、私が戦争に踏み出す瞬間というような、非常に、歴史学者がこういうことを言うのは眉唾なんです、そういうことを書こうとしたことについて申し上げていきます。

(2の①ですが)開戦経緯について、日清戦争、日露戦争それぞれをじっと見ていきますと、これは京都大学の高橋秀直先生という方がよく日清戦争について書かれていますが、例えば李鴻章と伊藤博文のそれぞれの手紙や文書を綿密に分析しますと、双方ともに相手国を軍事的に制圧する確信は最後までないわけです。ですから、なぜこの両国政府の中心にこの李鴻章と伊藤博文というような、知性派と呼ばれるような人がいたにもかかわらず戦争になるのか。というのは、つまり資料が揃って外交過程がわかるとむしろ理解しにくくなるというような状況もありました。

そして日露戦争についてもこれは同じでありまして、京都大学系は主戦論者が多いのですが、伊藤之雄さんという法学部の先生が書かれた『立憲国家と日露戦争』というこれも評判になりました本で、当時の衆議院の第一党であった政友会などが、言論のなかでは、戦争を避けようとしていた伊藤博文や井上馨などとともにより同じような国家をどうやっていくかというような行財政改革というような構想を伴った戦争を回避する方向性をもっていたというようなことを指摘して、実はロシアと日本は戦争をする必要はなかったのではないかと、イギリス側も日露間の戦争を望んでいなかったというようなイギリス側の外交文書を使いながら明らかにされているわけです。ですから日露に関しても、最後の瞬間、ロシア皇帝は、最後まで日露交渉をもう一回、交渉をやろうという電報を出した瞬間に戦争が起こるといえるのは有名な話ですけれども、なぜそうなるかと

というようなことはここでも宙に放り出されたままになります。

太平洋戦争についても実はこれは同じでありまして、新聞というのは新しい資料が発見されたということをしょっちゅう言っていますが、何が本当に新しいのかなかなかわからないのです。例えばアメリカ側が日本の外交電報をマジックというかたちで読んでいたというのは有名な話です。しかし、神戸大学の蓑原俊洋さんという先生が外務省の資料を丹念に読んだ結果、日本の、特に海軍の軍令部というあたりがアメリカ側の外交電報をよく読んでいた。ですから、日米交渉の直前のところで日米暫定協定案というものがあるわけですが、あれを日本側は実は正確に知っている。だとすると、おたがいコミュニケーション・ギャップで日米戦争になったという論が1970年代ぐらいの研究には非常に多かったわけですがけれども、両方が手の内を見合っていたときに何で戦争になるのかというところがまたわからなくなるわけです。ですから(2の①というの)は、実証史家なり歴史家が陥るかなりありがちな陥穽になるのだらうなということを感じていました。

おそらく開戦経緯と開戦そのもののあいだには飛躍があるのではないかな。つまり歴史を動かす、歴史の変化というものを動かす深部の大きな力というのは、例えば外交資料などからはなかなか出てこないのです。ですから、私が(1の①で)申し上げた「いつか来た道」というのを別の歴史学の言葉で言えば、開戦までの経緯を見切ろうとするような態度というふうに言い換えられると思います。つまり、外交電報をちゃんと分析すれば開戦までの経緯がわかる、だからその類似性を見ていれば戦争になるかどうかわかるっていう、そういう閉鎖的な？ 見方だと私は思うのです。

## 戦争正当化が国家と国民で重なる瞬間

私は現在の状況に対して比較的楽観しているところがあるのは、あまりこれで、だから戦争なんだというような燃え方は過去の戦争ほどにはまだないなという感覚はあります。つまり、戦争正当化の論理というのは国家と国民ですいぶん違っていいはずなのですが、実は過去の戦争の場合にはピタッと重なる瞬間というのがやはりあるんですね。ですから、そのへんをやはり研究していくことは、歴史学として大事なのではないかなと思ってまいりました。

それで3番は、本のなかでは日清戦争はこんな論理、日露戦争のときはこんな論理ということで戦争正当化の論理の部分をしつこく書きました。ここはむしろ本のなかで評判が悪かったのですが、ただ姜さんや上野先生にとって、私があとからいろいろ議論をいただくのに便利な部分として、日本特殊性ということ論ずるつもりはないのですが、やはり征韓論以降、太平洋戦争までを見ていくなかで外交思潮のなかで同じようなパターンがあるなどか、あとは外に出ていくときの論理が同じようなパターンがあるなどということです。(前提の1と2ということで、3の(1)(2)というところで書きましたのでごらんください。)これは、私は言語明瞭、説明不明瞭とよく学生のアンケートに書かれますが、ややむずかしいことを言うかもしれませんので、このあたり活字としてはかなり入れておきました。

まずは日本政府が、明治政府が比較的現実主義を取っていたというのは認めていいことだと思うのです、あまり戦争直前まであおらない。例えば、日露戦争前に、意外なことでしょうが幸徳秋水、大逆事件で処刑されますが、あの幸徳秋水が論じている非戦論に関しては、これは発禁処分にならないんですね。それに対して、内田良平という右の人々などがロシアを探查してその調査レポートを書いて「早くロシアを撃つべし」なんていうのを出しますと、それは発禁になるのです。ですから、政府が比較的日本の場合、なぜ現実主義を外交思潮にとっていたのか、思潮というのは政策と思想のあいだのことをここでは指しますけれども、その理由というのを考えておく必要があるだろうと私は思います。

これは吉野作造の説にのっているわけですが、実は明治維新の為政者たちは討幕派だったわけです。倒幕を論じる際に、基本的には攘夷思想をあおったわけです。福沢諭吉の言葉でいえば、この攘夷思想をあおった人が、明治維新になった結果、さあ天皇が攘夷してくれると思ったら天皇は外国の公使たちと会っているというようなことが報じられて、つまり「売られた感じ」をおそらく同志たちはもったに違いない。ですから、明治維新政府のなかでも大臣を務めた、例えば岩倉具視などの優れた政治家は、これに自覚的だったわけです。つまりこれは人を瞞着、だましたかたちで維新を行った。それをどう展開するかということが吉野の非常に面白い議論なのです。つまり為政者たち、自分たちは幕府のときには万国公法という非常に大事なことですね、自分の国民が他の国に行ったらその国の国民と

同様に扱われる、そういうとてもいい「古来の仁義の道」に基づくようないい法律を知らなかったのだと。ごめんなさいということで国民への外交情報の開示と言うのでしょうか、そういうのに比較的政府は自覚的にやらねば非常な危機にさらされたということがあった。だから明治維新政府、そしてこれはおそらく日露戦争ぐらいまでは、非常に政府の外交思潮は現実主義的だったのが特徴だと、私は思います。

では、国民はどうかということなのですが、国民の政治意識の定義はいろいろあると思うんですが、例えば五人組のときに、政治を2人以上で論じてはいけないというようなレベルの人たちや、なぜ明治維新になって突然、政治をわがこととして論じることができるのかというのは、かなりの転換があったはずです。これも吉野作造の説ですが、やはり近代的政治意識というのは、日本の場合、政府が、国際法というのは、その国際法になじんで日本もやっていくことは、お天道様の下では早く起きて畑を耕しなさいというような「道」の教えと同じだというふうに説いたことが大きいのではないかと。つまりルソーなどの天賦人権説が入るよりも、むしろ政府が危機を、ある種国際的な危機をあおって、ロシアが実はトルコなどに何をしたかというのを冷静に報ずることだけで国民が反応できる状況が生まれる。つまり近代的政治意識というものを日本人がもつというのはむしろ、日本においてはおそらく自国と外国との国際関係についての政策から、かなり生み出された要素があるのではないかと私は思います。

## 民権派が国民の背中を押した

そして3点目ですが、本来国民の、例えば戦争なんてやってほしくない、民力増強をやってほしいというような考え方を本来はバックアップしてもよかったであろう(③です)。民権派は議会在閣制以降は政党人として登場しますが、こういう人たちがどう振舞ったかというのを分析しますと、これが非常に面白いですね。例えば、条約改正を実現して国権を回復するために国会が必要だと、つまり政府が非常に無駄に税金を収奪するのをチェックするためではないのです。もしくはこれは地方の民権家の言葉ですが、共同体の結束力を培う軍事力、国力をつけるために国会開設が必要だ、つまり軍隊、徴兵制があるために国会が必要だというよ

うな発想があるのですね。ですから、民権から国権へという流れではなくて、やはり、もともと民権派というものは国権論的な色彩をもっていて、政府がある種の方向性を決めようという際には、どうも国民を背中から押すのがむしろ民権派の側だったのではないかと。政府から国民を守るというのではなくて、国民の背中を政府の側に押すというようなかたちで動いていたという特徴があるのではないかと思います。

例えば端的に、日本で普通選挙、普選というものを最初に論じたのは長野県で生まれた普通選挙期成同盟というのですが、これが日清戦争後に生まれます。なんで生まれたかと言うと、これは政府が三国干渉されて遼東半島を返してしまったと、なんで国民の力で戦った戦争の成果をみすみす政府の外交のまずさで失ったのか、これはつまり普通選挙権がないからだという議論で普選が論じられるのですね。ですからこういう日本的な特徴というのは、政府、民権派、国民というところで一つ、他の国の国民の形成の部分とはちょっと違うかもしれない、同じかもしれない、というところを定義しておきたいと思います。

そして第2点なのですけれども、為政者や国民が世界情勢と日本の関係をどうとらえるかというときに、かなり共通した面白い感覚というのを、私は、「征韓論」を題に申し上げようと思います。

征韓論の教科書的な理解というのは不平士族の反乱というものを未然に防ぐために西郷（隆盛）自身が朝鮮をして、朝鮮への使節を命ぜられるように廟議を動かして使節となって朝鮮に渡って、そこで相手方からある種謀殺される、殺されるように仕組んで開戦の名目を得ようとしたというようなことで論じられます。だけれども、そこに木戸、大久保などの内治派が現れて、明治6年の末に彼らは下野するということなのです。これは最近お亡くなりになりました坂本多加雄さんという方が分析したものです。非常に私は面白い政治思想の分析だと思うのですけれども、西郷というのはそういうことではないだろうと言うんですね。つまり彼が何度も板垣宛の手紙で書いているのは、幕府が滅亡したつい6年前のことですね、滅亡したのはひたすら攘夷の戦争を避ける、つまり幕府が維持したかった武威ですね、強いのだという。実は弱いということを隠すために武威の追求に終始したからなんだ、つまり因循姑息にしたやつらは滅んだと。だからここで、どうもわれわれはいまターニングポイントにきている。だから自分

たちが因循姑息ないまの有司専制の明治政府を黙って放っておいたら、物好きの倒幕になってしまうということを言うんですね。

## 「国を救う」気持ち—アジアにターゲット

明治維新というのは、端的に言えば、名分を正す道だった。名分とは何かということを書いているところが非常に面白いのです。つまりなぜ朝鮮——当時は大朝鮮国が正式名称ですが——なぜ朝鮮を討たなければいけないのかということは、これは別に文明開化、開化に遅れた国だからではないんですね。西郷の頭のなかではご維新のご主意、つまり幕府というとても駄目な武家政権と伺候、薩摩藩などを通じて伺候を結んでいた。そして天皇への朝貢を怠った国との関係を本来正さなきゃいけないのに、どうも朝鮮はその連絡をよこさない。ですからこの倒幕の根源とご維新の基を、朝鮮を撃つことで「国家の元気」を、いま明治6年の国家が確認するというような回路です。ですからここで私は西郷を弁護するわけではないのですけれども、例えば大朝鮮国に対する侮蔑の念とか、日本は開化したのに彼らは守旧的な儒教思想に凝り固まって開化しないという、そういう上下の優位性で征韓をしようという発想ではないのですね。むしろ自らが国内改革をやって救われる道とリンクしているということが非常に面白いと思いました。このような、つまり大朝鮮国、韓国にとっては非常に迷惑なことで、なんで日本からそんなことを言われなきゃいけないのかと、お前たちが勝手に国内改革すればいいじゃないかというような反論はすぐ出てくるわけですが、この組み合わせというのは実はすごく多いのですね。

(⑥、⑦、⑧というふうにつながりましたが) 大阪事件、これはあまりよくご存じない方も多いと思うんですが、大井憲太郎という自由民権のリーダーであった人物が、なぜか朝鮮に行こう、事大党という清国にくっついているやつらを追い出して開化派の親日的といわれる独立党政権を樹立しよう。その一方で彼らは、つまり朝鮮に渡る一方で日本の国内改革の準備もやって、資金を集めているわけです。その途中で捕まるわけですが、何て言っていたか。「我々は国を取るものにあらずして彼の国を強めてやる者なり」、「普通の戦争のごとくその国に対するのではなく、一部分の奸党に対する戦いだから、これは戦争ではない」という。これは大朝鮮国の不幸だけでない、結果は幸福になれる。つまり、ある国が現在問題

があるということをごちらの側から言いたて、ただ国家に対する戦争じゃないよ、その悪い部分をこちらが日本の国内改革をやるとともに滅ぼすのだというそういう発想をするのですね。

これは福沢諭吉の日清戦争の論理と同じでありまして、文明と野蛮の戦争という有名なものですが、「清国のごとき腐敗政府の下に生まれたるその運命の拙さを自らを諦むるの外なかる可し」というので、清国人を申し訳ないと、別に日本人は清国人にうらみもないけれども、なぜ皆殺しにされなきゃいけないのかと言えば、あなた方の政府が悪いからだ——。これは結果いまの経済のグローバル化ということと、無責任政府ではいけない、政府の民主的な国じゃない国は滅ぼされていいという、その発想とかなり近いものなのです。それできめつけ、吉野作造なども、まだ若き吉野作造が書いた論考で「吾人は文明のために、また露国人民の安福のために切に露国の敗北を祈る」。つまりこれは日本の開戦理由というのは、まあ門戸開放とかいろいろ理由はあるわけですね、韓国を守るということ。だけれども実はこの吉野の発想で、ツアーの政府が専制政府である。内閣すらない、そんな政府は滅ぼしていい、そこに住んでいる国民はむしろ日本に滅ぼされて幸せになれるという、そういう発想があります。ですから、これは端的に言えばアジア主義とつながると思うのですけれども、満州国の建国とか汪兆銘政権樹立とか日中戦争のやり方かなどこれとはつながってきます。例えば満州事変を起こすときに、こういう発想ですね。張学良政権の悪政に苦しむ東三省(注)の人々を、もしくは蒋介石という南方の国民政府の収奪にあう華北の人々を救うんだというような、そういう発想で満州事変を説明するわけですね。ですから、日本が救われなきゃいけないという強い第2、第3の維新を求める気持ちと、必ず相手国のどこかにターゲットを及ぼして、そこと結んでことを起こそうという気持ちとがかなり連動するというのが日本の一つの流れであるのが確実にあると思います。

以下(4番目)は、授業でもよく怒られるんですが、いちばん大切なことをいつも先生は言わずに終わるというのですが、4番目以降はのちのご質問や先生方との討論のときにご指摘いただきたいと思います。(拍手)

「基金」山崎      ありがとうございます。つづいて上野さん、お願いいたします。

(注)東三省——黒竜江・吉林・遼寧(旧奉天)の3省を統合した呼称。東北三省ともいう。ここから興った清朝が華北に侵入し中国支配に乗り出すと父祖発祥の地として神聖視して軍政を敷き、盛京(奉天)・吉林・黒竜江の3将軍を置いて統轄させたことがその始まり。

## 提起——上野 千鶴子

### 女性の国民化—「分離型」と「統合型」

上野千鶴子 戦争というのは国民国家の最大の事業です。それを総力戦と呼びますが、総力戦には軍事戦のみならず、経済戦、心理戦、人口戦というのがありまして、出産する女は人口戦の兵士と呼ばれています。したがって、きょうび子どもを産まない女は、人口戦の戦士として役に立たないということになります。そういう総動員体制をつくるためには、国民として利益を受け取っている人たちだけではなく、受け取っていない人たち、相対的に不利な立場にいる人たち、これをマイノリティと言いますが、このマイノリティをも動員しなければなりません。マイノリティの動員という視点から戦争を見たらどうなるかということを考えてみたのが、私の『ナショナリズムとジェンダー』（青土社、1999年）という本でした。

その本の中で、私は「女性の国民化」という概念を打ち出しました。なんでも「化」とつけるとプロセスを意味することができます。「国民化」という概念を用いることによって、国民と国民じゃない人々のあいだに、一級国民、二級国民、三級国民というようなグラデーションを考えることができます。たとえば女性の国民化について考えるということは同時に、女だけでなく他のマイノリティ、具体的には被差別部落民や沖縄の人たち、そして植民地の人々について考えることとつながります。歴史研究のうえでは、女だけでなく被差別部落民や沖縄の人たちも、総動員体制のもとでマイノリティとしての戦争参加を自発的におこなったということがわかっています。

では、いったいどんな論理で、女性やマイノリティが総力戦に動員されていったのでしょうか。その謎を解いてみたいと思ったわけです。この女性の動員には二つのサブタイプがあります。一つは分離型、もう一つは統合型といいます。かんたんに言うと、分離型は「ディファレント・バット・イコール」、男らしさ女らしさは「違ってはいるが対等」という考え方にもとづいています。つまり、分離型は、男には男らしい参加、女には女らしい参加、つまり女らしさを守ったまま銃後を守る参加の仕方があると主張します。これに対して、統合型は男も女もない、女も戦争に男並みに参加しようという主張です。この究極は、女も兵隊さんになって前線で戦おう、

という考え方です。そんなことが歴史上、事実があったかと言うと、実はちゃんとありました。

1945年6月、戦争の最末期に日本は自由兵役法という法令をつくります。これは15歳から60歳までの全男子、17歳から40歳までの全女子を兵士とするという法律ですが、結局実行されないまま敗戦を迎えます。それ以前に満州事変勃発に際して、大日本青年団の女子部が、「じっとしてられないから、私たちも義勇兵になりたい」と要求して、当局から「早まるな」と、待ったをかけられるというできごとが起きています。

日本では女性兵士はついに生まれませんでした。他の国では、女性は実際兵士になっています。ソ連には赤軍女性兵士がいますし、中国にも八路軍に女性兵士がいます。ただ、これまでのところ、徴兵制のある国ではほとんど、イスラエルもそうですけれども、男女別学軍というか、女子隊をつくる傾向にあります。究極の統合型は男女共学軍ですが、これがアメリカ型です。こうなると女性の完全な統合が達成されます。

加藤陽子さんは、戦争がどういう理屈でなされるかという、たいへん面白い本をお書きになりました。国のロジックと民のロジックが一致したときに、「セーノ」と一気に戦争になだれ込む瞬間があるということを経史的に検証なさったのです。西川祐子さんの『近代国家と家族モデル』（吉川弘文館、2000年）という本のなかに、1930年から37年にわたる全日本婦選大会、「女にも選挙権を」という大会の決議文の主語がどう変わるかという非常に面白い研究があります。最初の年の決議文の主語は「全日本婦人普選大会」という大会名だったのが、しだいに「われら」、「われわれ」、「私ども」に変わっていきます。初期のころは、大会参加者を限定的に指していたのが、最後になると「私ども婦人は」という主語で、日本の女性全部を指してしまうようになります。

## 論理は原因か結果か—ご都合主義か

これについて、私は、加藤さんに質問があります。加藤さんのたいへんな力のこもったスピーチにもかかわらず、私はいっこうに説得されませんでした。3つあります。1つは、本当に国民は論理で説得されたのか、という問いです。別の言い方をすると、論理は原因なのかそれとも結果なのか。というのも私は、理屈と膏葉はどこにでもくつつくと考えているか

らです。私の勤め先であります東京大学の法学部では、一つの前提から十のまったく異なる結論に、完全に論理的な道筋をたどって到達する訓練をしていると伺っています。(笑) 西川祐子さんのこの研究でも、実のところこの大会のロジックの組み立ては、事件に引きずられて事後的につくり上げられたもので、決して論理が事件に先行したわけではないということがわかります。

2つ目の問いは、そうだとしたらこのような都合主義的なロジックに簡単にだまされるほど、国民は受身で単純な存在だったのかという問いです。

3つ目は、そのとき、それに説得される国民というのはいったい誰なのか、その人々は一枚岩なのかどうか、という問いです。国民のなかには利害の異なる集団がいて、そこでは必ず支配的なロジックに対して、対抗ロジックというものが登場するはずですが、それを私たち社会学者は、資源動員論の用語で、「フレイミング・コンテスト（論理の枠組みの競争）」と呼んでいます。フレイミング・コンテストのなかでも、つねに正しいロジックが勝つとは限りません。では人々は、論理でなければ何によって動かされているのでしょうか。答はインタレスト（利益）というものです。しばしばナショナル・インタレスト（国益）とも呼ばれますが、加藤さんが説得的に展開されたこのロジックの背後にあったものは、もっと露骨に言うならば、日本の覇権国家への欲望だったと言い換えてもいいのではないのでしょうか。つまりアジアの盟主たらんとする明治以来の覇権国家への欲望です。

こういう国民国家の総動員事業としての戦争がいまや新段階に入ったという姜さんの観察に、私はまったく同感いたします。21世紀はシビル・ウォー（内戦、市民戦争）の時代だ、そう喝破した方がいらっしやいました。シビル・ウォーとは戦線なき戦争、どこが戦線なのかわからない、敵が見えない、交渉相手がいない、だから引き際が決められない、そういう戦争です。このような戦争に、日本はとっくに参入してしまいました。にもかかわらず、戦線の見えない戦争の、もう一方の強力な当事者が国家であるという事態だけは変わっていないわけです。しかもそこにはハイテク戦争とクリーンな軍隊が登場し、女もボタン一つを操縦できればここに参加できるという条件が成立しました。

こういう話をすると、はるか遠い世界のことかと思われるかもしれませんが、皆さん方が日常のただ中に起きていることです。先ほどの「女性の国民化」のうち、分離型か統合型か、は職場における女性の労働への動員にもあてはまります。もっと簡単に言いましょう。均等法以後の女が、総合職か一般職かの、股ざき状態に置かれていることと変わりません。女も企業社会に巻き込まれていって、総合職となって男並みに過労死するのか、それとも一般職となって女らしく差別に甘んじるのか。つまり女性の国民化の帰結は、分離型のなかでは、女らしさに甘んじて二級国民の地位を甘受するのか、それとも統合型のもとでは、男なみの参加をめざすことによって、自らの女性性、ここでは主として子どもを産み育てる能力ですが、それを自己否定するのか、のあれかこれかのディレンマに女を立たせます。このようなあちら立てればこちら立たずといったダブルバインドの状況に対して、現在の女性が無意識に答を出した結果が、現在の少子化ではないでしょうか。

では、「女性の国民化」とは女にとって何でしょうか。最終的には裏切られる運命にある、しょせんは果たされない約束なのではないでしょうか。その果てにあるのは、女が家長長制の共犯者になる道なのではないでしょうか。別な言葉で言うと、抑圧者の仲間入りといってもかまいません。

これについては沖縄の研究者で、野村浩也さんという方のご発言をご紹介しますと思います。彼は「沖縄大好き」という本土のギャルに会うたびに、必ずこう言うことにしているのだそうです。「そんなに好きなら、基地も持ってって」。沖縄の人々にとっては、日本人になるとは何を意味するか。それは抑圧者に似るということを意味する、と彼は論じます。抑圧者の仲間入りをするということは、他の誰かを、別な被抑圧者に仕立て上げるということにほかなりません。

## 女性兵士、対抗暴力をどう考えるか

もう一つべつな角度から、女性と暴力という問題系を考えてみたいと思います。というのも、いま私が考えてきたのは国家暴力の問題だからです。

国民軍の女性兵士に「あなたもなりたいたいのか」という女に向けられた問い、軍隊の「男女共同参画」という悪い冗談のような想像は、日本人は能天気な顔をしています。徴兵制のある韓国の人たちにとっては他人事で

はないはずであり、私は韓国のフェミニストが「女にも徴兵制を」と言い出さないかどうか、非常に注目しております。ところがもう一方で、国家暴力に対する対抗暴力があります。テロリストと呼ばれる人々の行使する暴力もこのひとつです。民族解放軍や革命軍の女性兵士という問題系です。パレスチナの19歳の女テロリストの自爆テロに、多くの人々は言葉を失ったはずで、彼女をテロリストとして指弾することは、私にできるだろうか。国家暴力に反対する私たちは、他方で対抗暴力をもしかしたらロマン化し、テロリストを英雄視してしまうかもしれない誘惑にさらされています。その危険に、私は、歯止めをかけておきたいと思います。日本にも革命軍の女性兵士がいました。日本赤軍の重信房子のような人です。

暴力をジェンダーというパースペクティブから見れば、対抗暴力もまた、暴力の主体になりうる者によってしか担われないということがわかります。考えてみましょう、女性はドメスティック・バイオレンスの被害者となっています。夫や恋人にボコボコ殴られる被害者の女に、「あんたも殴り返せ」というアドバイスをする専門家がいるとお考えでしょうか。ためしに殴り返してみてください、もっとひどいお返しに遭うだけです。暴力に圧倒的な非対称性があるとき、支配的な暴力は対抗暴力を徹底的にたたきつぶす方向に働きます。小さな対抗暴力が100倍の反撃によって返される。そのようなかたちでゲリラ戦の戦線は、パレスチナで拡大し、イラクで拡大し、ベトナムでも拡大してきました。ゲリラによる数人の正規軍の犠牲を、村の皆殺しという見せしめ的な暴力で返すのは、ドイツ軍も日本軍もやったことです。ベトナムではアメリカ軍も同じことをやりました。4人の民間人の犠牲に対する反撃として、ファルージャの町を包囲し、すでに600人以上のイラク人の死者を出している現在のアメリカ軍も、同じことをしています。

暴力というのは、他人に自分の意思を押しつける問答無用の手段です。それを最も効率的に果たすものが軍事力というものです。現在の多くのテクノロジーが、より効率的に「殺す」ための軍事テクノロジーから生まれてきたということは、皆さんよくご存じかと思います。

このような効率の原理に、女性もまた参入していくのかどうかということが、問われています。それこそが分離型か参加型かを問わず「女性の国民化」の問いなのですが、こう問いを言い換えることもできます、「効率は

女を殺すか？」。

いったんは答えを保留しましょう。もしかしたら女も男と同じように効率よく敵を殺す側に回れるかもしれません。アメリカの女性兵士はそれを証明しました。では、こう問いかけましょう、「効率は子どもを殺すか？」殺します、足手まといですから。あの満州からの熾烈な引き揚げ体験のなかで瀬戸際に追い詰められた大人たちは、自分を守るために子どもを犠牲にしました。母性愛より自己利益が優先することは、歴史が証明しています。それでは、こういう問いはどうでしょうか、「効率は高齢者を殺すか？」殺します。年寄りも効率優先の社会では、邪魔者であり厄介者だからです。PPK運動ってご存じでしょうか、ぴんぴんころり運動というのですけれども、きょうまでぴんぴんとして、あしたころりといこうというのでPPK体操などを広めている運動ですが、こういう標語を聞くたびにおぞましさが体が震えます。これはファシズムですね、社会の邪魔者になったら死ぬという発想です。

最後の問いは、「効率は障害者を殺すか？」答えはイエスです。そうなれば最初の問いに戻りましょう。子どもと高齢者と障害者を抱えたとき、「効率は女を殺すか？」答えはイエスです。そして暴力こそは目的達成を最短距離で、つまりもっとも効率的に実現する途だと見なされていますから、だとするならば、暴力の問題については、どの目線から見るのか、どの立場に立つのかということが問われるでしょう。

暴力なき世界を考えることは夢にすぎない、という政治学者たちのリアリズムがあります。とりわけ国際政治学者にその傾向が強いのですけれども、政治学者である姜さんはこのところ、「北東アジア共同の家」とか、あるいは新しく生まれ変わった「アジア主義」、「盟主なきアジア主義」というふうな主張を、おっしゃっています。宮台真司さんとの対談を収めた近刊の『挑発する知』(注)のなかでも、同じ主張をくりかえしておられます。題名のとおり、私も十二分に挑発されましたから、挑発し返したいと思います。このような政治学的リアリズムが陥る先は、現状追認にしかないのではないのでしょうか。「北東アジア共同の家」というふうな構想は、ある意味でニューライトの現実主義的な政治家なら——ニューライトというと「つくる会」と混同されかねないので、もっと別の言い方をしましょう、保守合理主義者ですね——つまり最も合理的かつ理性的に国益を

(注)『挑発する知』——姜尚中・宮台真司、双風社、2003

考える保守派であれば、誰でも考えつくような戦後政治の極めて妥当な着地点です。そのようなブルジョア保守合理主義者が言うような構想を、姜さんのような人が——日本国籍もなくしたがって参政権さえない——姜さんのような在日の立場にいる人が口にしなければならないのは、どれほど無念で断腸の思いであろうか、と私は思わずにはいられません。にもかかわらず、それを姜さんが主張なさらなければならない日本の現在の状況とは、そのような正気の保守合理主義者すら欠いた政治状況だということを意味します。

最後に、このような政治リアリズムが帰着した先として、アジア女性基金もまたそうであったと私は考えています。私は、きょう、ここに、アジア女性基金主催の集まりに出てまいりました。その趣旨に賛同したからではなく、それを批判するために出てまいりました。批判というものは、批判される当の相手の耳に聞こえるところで言うべきだというのが私の信念です。とりわけ2003年、昨年でアジア女性基金の事業はいったん終結いたしました。いまアジア女性基金は、事業の歴史的な総括を受ける転機を迎えており、それを自らの手で積極的に取り組もうとしておられます。さまざまな批判の多いこの事業を、無視してなかったことにするより、あったほうが良かったのか、ないほうがましだったのか、歴史的に評価すべき時期に来ていると思います。と同時に、批判派の私たちもまた、私たちに何ができ、何ができなかったかという限界を含めた議論に参加すべきではないでしょうか。

アジア女性基金は、これ以外に日本政府に可能な政治的解決のオプションはなかったという、冷徹な政治リアリズムからスタートしました。しかしながら、政治リアリズムの困った帰結は、現状追隨に陥りがちなことです。もし私が現状追隨のためだけに発言するのであれば、フェミニズムの存在意義はないと思います。以上です。(拍手)

「基金」山崎　　どうもありがとうございました。それではここで10分間休憩を取りたいと思います。

【休憩】



## 第2部

— パネル・ディスカッション —

上野 千鶴子

加藤 陽子

姜 尚 中

上野 とくに司会者がいないので、私が司会しちゃおうかな。(笑)

私から質問を投げましたので、まず姜さんと加藤さんのお2人から答えてほしいなと思います。姜さん、いかが？

## イラク戦争と日本、北東アジア

姜 じゃあ、答えましょう。ちょっと個人的なことを少し言わせていただくと、私が生まれた1950年、ちょうど朝鮮戦争(注)がありました。それについて大学に入るまで詳しく勉強してなかったんですね。最近の韓国映画に「太極旗を翻して」というのがあって、日本のタイトルは『ブラザーフード』ですか、朝鮮戦争に参加する兄弟の話です。韓国ではまた1968年に北朝鮮からゲリラ的に、その当時の朴正熙(パク・チョンヒ)大統領を暗殺するためにミッションが来て、韓国側もそれを用意していたわけです。その人たちを養成するある島でいろいろな訓練を施して、ある種の暗殺部隊ですけども、彼らが反乱を起こします。実際の話で、1人を残して全部射殺されました。そういう映画も韓国ではいま約1千万人が観たといわれていますから、4人に1人以上が観たことになりますね。現在の韓国ではいろんな意味で、冷戦にまつわる、かつてはタブーであったことが映画化されているわけです。

何を言いたいかと言うと、「北東アジア共同の家」と言ったのは、政治的なリアリズムというよりは、どう言ったらいいんでしょう、自分の個人的なというか、いろんな意味で自分の重力の全体をかけた一つのプロジェクトのつもりなのです。自分で言うのもなんですけども、こんど、自分の半世紀を振り返って『在日』という本を書きました。去年からずっと書いていたんですが、そのなかに自分の考えていることを少し自分の生い立ちから始めて書きました。上野さんは政治的リアリズムとおっしゃったけれども、なぜ私が北東アジアに見開かれていったのかということもですね。なぜそういうこと考えるようになったのか。いろんな経緯があるんですけども、ひとつはやはり9・11以降、ぼく自身は、もしかして10パーセントぐらいは戦争が起きるのではないかと思いました。当然、朝鮮半島のウォッチャー的な人々と話すと、そのなかに何人かの人はあたかもそれが政治的リアリズムであるかのように言う人もおりました。9割がたそれを否定していましたが、なにせ私自身はやっぱりそちらの方面で蓄積

(注)朝鮮戦争——1950年6月25日、北朝鮮軍が韓国に侵攻して始まった戦争。アメリカ軍を主体とした国連軍、中国義勇軍も参戦した。53年停戦し板門店で「休戦協定」締結。韓国では韓国戦争、通称6・25(ユギオ)と呼ばれる。

があるわけではなかったので非常に不安でした。結局自分の生涯というのは朝鮮戦争に始まって第2次朝鮮戦争で終わるのかと。つまり朝鮮戦争というのは400万人近くの犠牲を生んだ地上戦だった。ベトナム戦争が360万人、アメリカ人が5万8000人死んでいるわけですね。朝鮮戦争は400万近くが亡くなったわけです。これは戦争としてはかなり膨大な戦争だったと思いますね。

そういう事態がもう1回起きるのではないかということが、まったく空想ではない状況というものが、去年のイラク戦争開始からずっとこう続いてきた時期があったわけです。もちろんそれ自体は杞憂でしたけれども、私はその6カ国協議(注)という、これもまた政治的なリアリズムですね。いろんな考え方があると思うんです。つまり国家というものを否定して、国家から自立して、個人として可能な限り個人同士のある空間というものをつくり上げていこうという行き方もあると思うんですね。ぼくみたいに日本の国籍をもってなくて参政権もないという立場からすると、ある種デラシネ的なものだという人もいるかもしれませんが、私自身は、政治的なリアリズムですらもこの1年間にはなかったのではないかと思うんです。

## 「戦後」の無重力状態と「妄想の戦争」

ブッシュ政権が始めたイラク戦争、これが始まったときにぼくは「妄想の戦争」と、あるところで書きました。間違いなく妄想の戦争です。これは明らかに観念的につくられた設計図に従って戦争できる、それによって人を変えられる、ちょうど黒板にいままでに営々と築いてきた人々の歴史というものをさっと消して、その上に新しく白墨で黒板に何かが書けるような、少なくとも去年の5月までは、あたかもそれが可能であるかのように日本の国民の世論のなかにも、そういうものが芽生えていたと思うんですね。ですから、ある民放のディレクターがぼくに対して、「いや、姜さん、北朝鮮という国をアメリカの圧倒的な軍事力によって、できる限り人を殺さずに変えられるならば、それはいいんじゃないか」というふうにぼくにマジに言うわけです。驚きました。いやこれは公共の放送、テレビ局のディレクターの考えなのかと。しかもそれは非常に若いディレクターだったですね。

これは、やはり、妄想以外の何ものでもないわけですよ。そこには人

(注)6カ国協議——北朝鮮の「核問題」に関する韓国、北朝鮮、中国、日本、アメリカ、ロシアによる協議。第1回は2003年8月27-29、北京、第2回は2004年2月25-28日、北京で開かれた。

がない、人っていうものをどのレベルでおさえて、戦争とかそういう問題を考えていっていかってということが、全然、このおそらく30代のはじめだと思えますけれども、少なくともいま民放でディレクターやるくらいですからそれなりの学歴あるはずなんですけれども、ほとんどそのリアリティがぼくには感じられなかったのですね。いまの日本全体のかなりの部分にそういう無重力状態ですよ、それがある。この無重力状態というのは、ぼくは1980年代に感じたんです。あのバブル経済の真っ盛りのときに、戦後という重力がなくなったわけです。

上野　姜さん、これからまた20分のスピーチをなさいます？（笑）

姜　ああそう、あと1、2分で——。

その無重力状態になった、その裏表に妄想の戦争みたいなものが出てくる。だからぼくは、6カ国協議というのは、誰かはこれを政治的リアリズムと言うかもしれませんが、これに賭けてみようと思ったわけです。これに賭けてみることによって、ひょうたんから駒が出てくるかもしれない。それはやっぱり、この地域においてナショナリズムのボルテージをできる限り低くして、なんらかのかたちでナショナリズムの自閉的な現象を解き放たなければいけない。それは「アジア主義」という言葉でぼくはくくりたくないですね。やはりもっとそれは違うものになるのではないかというふうに考えました。

では、ナショナリズムというもののボルテージをどうやって低くして、それを「超える」という表現をあえて使いますけれども、何があるのか。やっぱりぼくは具体的な問題を解決していく一つの思考実験というものが、やっと現実的に始まったのではないか。北朝鮮のクライシスをいかにして問題を終息させるかによって、この地域のなかにナショナリズムを超えられるような契機というのが見つかるのではないかという、いやこれはイリュージョンかもしれませんが、ぼく自身はそう思って、そのずっと先に北東アジアというのがあるのではないかと。それはやはり、いままで国民の一員であるのか、個人であるのかということに絶えず悩んできた自分の立場からすると、日本対「在日」でもない。やはりもう少しいろいろな多様性をもったアイデンティティをもって生きられるのだと考えたい。そう

いう具体的な空間が北東アジアだという、そういうつもりだったのですね。

上野 ありがとうございます。この話、先ほどのご発言では出なかったのですが、北朝鮮の問題についてこれだけ踏み込んだ話を姜さんから引き出せたので、私の挑発がちょっとは功を奏したかと思いました。いまの話を書くときによくわかりますが、よくわかると同時に、やはり痛恨の思いがあります。というのは、現在の日本に政治リアリズムすらない、とおっしゃった。政治リアリズムから考えたら、いちばん合理的な保守政治家なら、未来志向型の解決を考えて、さっさと謝罪して国家補償やっちゃえっていうほうがずっと明快な着地点なのに、そういう正気の理論すら出ないで、いたずらにナショナリズムをあおるような言論ばかりが横行しています。

私の言いたいことは、こういうことです。このような政治リアリズムすらない日本の政治的真空のなかで、日本における政治リアリズムを、姜さんが全身を賭けて体現してしまわなければならない事態は見ていて大変につらいというか、もしちゃんとした政治リアリストが保守派のなかにいれば、本当は、姜さんはさらに軸足を移してそういう保守リアリズムを批判する立場にお立ちになるはずの方なのに、それがおできにならないような状況ができてしまっているということが情けないということですね。

姜さんは、イラク戦争が妄想の戦争だったとおっしゃいました。後発言のなかの民放のディレクターの発言を聞いて仰天しましたけれども、妄想の戦争であるだけではなく、おごりがありますね。軍事力で正義を押しつけることができる、軍隊で民主主義を押しつけることができるという考え方ですから。にもかかわらず、妄想から実際の軍隊が動いてしまうということが、悪夢のような事態です。

そうしますと加藤さん、いったい加藤さんのおっしゃった先ほどのロジックは、妄想なのかそうじゃないのか、本当にそういう妄想に歴史が動かされたのか、国民は妄想に説得されたのか、私の先ほどの3つの質問にお答えいただけたら、大変うれしいんですが。

## 戦争と国家の論理—国民の受け止め方

加藤 ありがとうございます、司会をやっていただいて。まずお答える前に、姜さんが非常にお答えになりにくかったなあという感じがあって、

やっぱり『在日』っていうご本に書いてしまわれていて、おそらくそれを反復される、自己増殖みたいなことはきっとお嫌なんだろうなと思って。どんな感じかなというのを付度するのは結構歴史家は好きなんでやっていたのです。『挑発する知』という本を読み直してきて、上野さんが感じられたことはすごく正当で、姜さんはこのなかで宮台さんとともに、自衛隊という最大の実力組織というものを社会にどう着床させるかという本格的な議論もない、暴力をどう位置づけるかというよりも、むしろわれわれは国民国家論とか、国民とか国民に入らないのは誰かとか、そういうようなことはよく論じてきたけれども、国家ということに対してあまり論じてきてないという、非常に面白いご指摘がございました。ああそうか、やっぱり暴力というのは、ある種の前提としてお考えになられているのだと、聞いていて思いました。

あと「北東アジア」ということで、私は姜さんの書かれたものを読んでイメージしていたのは、やっぱり韓国と北朝鮮と日本という構図では、韓国を入れることによって日本側のある種のスタンスが落ち着くという感じが確かにあるなということをおもいます。去年の10月に私が韓国にまいりましたときに、知識人の方でしたが、数人、やっぱり北朝鮮が韓国に攻めてくるというのはやっぱり本当に考えていない。だから日本がなぜそんな脅威を感じて国会の有事法制のようにそれを使うのか、非常に不思議だという感じをおっしゃっていました。

それを私は思い返すに、あのとき実は危なかっただろうっていうのは、歴史には何度もあるわけです。いまわれわれ北朝鮮問題は明示的に危ない問題だというふうに提示されているけれども、実は1994年のときにアメリカと北朝鮮というのは一触即発になっているわけです。だけれどもそれを、1994年の時点でわれわれはわかっていたか。私の記憶では、あまり自覚してはいない。10年前のことでした。ですから、やはり本当にあるその危機の度合いとわれわれが感じる度合がずれているだろう。だからそのまま、北東アジアといういろんな構成員を入れてくことで、お考えになりたいのかなというのがその付度でありました。

もう一方で、われわれ日本史の研究者は中世史などもカバーすると、例えば十三港っていうような日本海に面している北東の港がいかに重要な位置だったか、例えば沖縄もそうですけれども、2000キロ内でフィリピンな

ども含まれればウラジオストックも含まれる。だから逆に上野さんの批判は、これはちょっと地政学的な発想なんじゃないかっていうところにくるかと思っていたのですが、そうでもないのでしょうか。あとでお答えいただければと思います。

ただ、こういうこともあります。私と同じ学年の作家であります島田雅彦さんが、『彗星の住人』をはじめとして、『美しい魂』とか『エトロフの恋』とか三部作を書いています。なぜエトロフという場所を選んだか。大胆なことに雅子さん、彼女だと相当される人が、主人公を訪ねて、天皇家の人がエトロフに行っちゃうかもしれないというような、そういう見通しも含めた非常に面白い問題作です。彼がなぜこれを書いたのかというのは、先ほどの2000キロ圏じゃないですが、やはり場所というものをもう少し変えて考えることで、ナショナリズムみたいなものもモデレートなものにできるのではないのかという、1961年生まれの間人が考えそうなことなのだろう、などと思いました。

時間は…また20分かと言われてしまうとあせってしまいますので、私の答えにいきます。上野さんからご指摘ありました3点は、ちょうど私がこの本を、ある私のゼミに出ていた社会学の学生に送ったときに同じように反論されたことでありますので、やはり社会学者から見ればスキがいっぱいあるスイートスポットに入っちゃったんだと思います。答えやすいところからいきますと、2点目、ご都合主義的なロジックというところですね。やはり先ほど話しました西郷の論理でも、また、民放のディレクターも、ご都合主義ですよ。それが本質なんだと開き直るのは一つですが、受身で単純な、そんなにだまされやすい国民だったのかというところについて、私は、政府とか官というもののイメージはすこし社会学者もしくは現代の政治学者と違うかもしれません。

## 官・軍とかけ離れていなかった「民」

というのは、『徴兵制と近代日本』という本で書いたのですが、日本軍の戦前の兵士の質というのは、これは資料的な批判が必要かもしれませんが、例えば中国の戦場に出て行ったときに接収した店などに掛かっている漢詩を、いわゆる少尉さん以上の尉官ではない人でも読めちゃうっていうこと。つまり、ある種の国にとってはいわゆる徴兵制、志願制の国でもそうです

けれども、兵士というのはろくな人間になるものではないとされます。けれども日本の場合、やはり試験制度があり、国家が一生懸命やった社会教育というのでしょうか、やはり兵士になれる人間というのは30万人中、徴兵制度で検査を受けさせられても少ないのですね、甲種合格はその3割程度です。ということは、やはり小学校だけで字を読めないレベルの人は甲種にならないのですね。徴兵されないという実態がありました。そういうのも一つある。だから、先兵となるべき兵の質という点で、官と民が、そんなに離れている国だろうかというのが私のイメージにはある。

一方で官の側も、例えば日露戦争のときにロシアの将官たちはまさに貴族ですね、大地主の貴族です。そんな人たち、もしくは官僚もそうですけれども、ふだんの生活がフランス語でなされる、官僚たちはドイツ語をしゃべる。そういうロシア人がいる国に比べてみると、やはりなんととっても、加藤高明という首相は初めて外交官試験を受けて首相になったとか、幣原もそうですけれども、やはり官と民というものの差が、おそらく20世紀の国家のなかで非常に小さかった国ではないかという気がします。

となると、国民がそんなに受身で単純なのかという問題ですね。国家の側が出してくる論理が、非常にご都合主義的な、つまらない、当たり前のことかもしれません。国家の側が出し当時の人が受け取ったときに、それがつまらない、単純だと思ったかどうかはわからないというのが私の立場です。例えば太平洋戦争の開戦のときは、国家を賭ける存亡の戦いだというのは誰でもわかることで、よく引用されます。昭和研究会という海軍の政治畑の人たちが集めた、東大法学部の学者さんたちをいっぱい揃えた研究会で論じられていたのはこういうことです。形容詞の最大級を使った扇動の仕方は開戦のときにはしてはならない、ということ言うのですね。これは海軍の少佐も言うし、学生の側も言います。つまり形容詞の最大級であおるといのは、これは陸軍の戦争であって、戦争に負けが込んできたときに最大級の上はもう使えない。だから形容詞の戦争でなく、やっぱり本当に追い詰められて自衛の戦争というところで訴えないと国民がついてこないだろうというレベルでの、論理の出し方のリアリズムがあったのではないかというのが私の印象ですね。

そして第1点目のご質問にお答えしますが、本当に国民は論理で説得されたのかという点。理屈と膏葉はあとからという、上野さんは鋭いと思い

ます。私がここに引用してある資料を厳密に読みますと、例えば福沢にしる吉野作造にしる、厳密に言えば開戦の1年前とかそういう議論ではありません。開戦直後とか開戦直前です。だからおそらくもう政府も国民も決まってしまったことだ、だから吉野さんが気持ちよく死んでもらうために背中を押したという、そのレベルの論議だというのは私も自覚していますし、バレたかというか、バレているんですけれども。(笑)ただそのときにやはり、ではインタレストというところを押していけるかっていうと、またそこで先ほどの外交文書が全部あいたときに理解できるかというのと同じになります。『日経』の経済欄などに大恐慌とか、言葉の解説などをよく読んでみると、やはり戦争に、日本が満州事変、日中戦争を起こしていったのは不況からの一つの脱出方法であったという言い方をしていた。70年代、80年代の学説はしていました。けれども、いまの経済学の学説はそれを支持しない。

つまり1933年では底は割れていて、とにかく20世紀前半の先進国のなかで最も早く経済的な利益をあげている国だった。ですから経済的な要因、そして朝鮮半島から得られる利益、そして満州から得られる利益っていうのを比較換算してみると、やはりこれは損な賭けだという結論しか逆に出ないことになるかもしれません。先ほどの海軍省の調査課でなされた面白い会議の資料を読んでみますと、1941年10月ですが、大東亜共栄圏をつくると、共栄圏でなくて「共貧圏」になるのに違いないということを言っているんですね、軍人が。だから、確かに上野さんがさっきおっしゃったような日本がイギリスに代わる、日本がアメリカに代わる、日本がオランダに代わるという点で帝国主義的植民地を日本的な植民地に代えることはできるかもしれない。せいぜい上履きを履かせられることができるかもしれない。だけれども日本を含めて、現地を豊かにすることはできないというような開き直りの認識はなかではありました。

国民の前ではとてもそんな議論は公表されないわけですがけれども、ただ現実に銀座のバーなんかで海軍の軍人が話していたことはきくと伝わるといって言えば、ドイツやソビエトにおける情報の統制と比べて、日本の統制がどこまで本当に想像を絶するようなことを海軍が考え、それを国民がまったく忖度できないという感じではないのではないというところを感じます。あ、2点しか答えていませんが、当面そのぐらいで。

上野　加藤さんのいまのお答を聞きながら感じたことは、知識人の役割が犯罪的だということです。いまのご説明聞くと、現状はどうにも変えられないということがわかったときに、それを論理的に正当化する役割を果たした——こういうことをやる人を御用学者というんですが——国民の背中を押して気持ちよく死んでもらうという、事後的な正当化を果たしたというのが知識人の役割だということですね。それは直ちに私たちに跳ね返ってきます。いま私たちがここで同じことをやってはいないか、という自省につながりますね。

## 政治的リアリズム—事後的に出る追認の論理

私がさきほど政治的リアリズムについて批判的に述べましたのは、これしかないという現状追認を行っていけば最後にどうなったかを考えるからです。そしてみんなリアリストになった・・・ということになってしまう。そうなればそれを事後的に追認し正当化するようなロジックしか出てこなくなります。大東亜共栄圏どころか、実際にできそうなのは「大東亜共貧圏」だ、というさきほどの加藤さんのお話はおもしろかったですね。もし保守合理主義というものがあって、冷静にコストとベネフィットを勘案したら、こんな勝ち目のない戦争をやるのは無謀だということは、ただちにわかったことでしょう。バランスシートを考えればもうちょっと穏健な選択肢もあっただろうに、それが外には言い出せないという状況が生まれるわけですね。その背後にあるのは情報統制やメディアファシズムですから、メディアの役割もまた非常に罪深いものだと感じました。

会場からたくさん質問をいただいています、いちばん数が多いのは姜さんに対してです。

姜　いや、そういうこと、ない。

上野　私は、今回のイラク戦争への自衛官派遣については非常に危惧していることがあります。一つは報道が従軍記者によって行われているということ。これは、もうすでにアメリカ軍がアフガニスタンでやったことですけれども、兵士と運命をともにし、兵士にその生命を守ってもらう立場にいるジャーナリストによって兵士の目線で報道されている。これはどの

立場からの報道かというのはミエミエなわけです。それともう一つ、想像したくない事態ですが、国のために「汗をかく」——これはたんに国のために「血を流す」ということの婉曲語法に過ぎません——その任務のためにイラクに赴いた自衛官の生命に万一何かがあったときに、犠牲となった人に対する批判が封殺されるという可能性です。

同じような危惧を表明した質問を、ご紹介しましょう。

「多くの人が現在戦争には反対しているが、一方で自衛隊に何かあったときに、そうした人たちがいっせいに『やり返せ』という声を上げるような気がする。日本の国では死者に鞭打つなという傾向があります。犠牲がうまれたときにその原因を問うことなしに、それ自体を神格化して、批判も封殺されるという動きが出てくるのではないかと、非常に怖れを抱いています」。

この質問についてはあとで姜さんにお答えいただきましょう。

加藤さんのお話を聞いて、それではロジックってそんなに無力なのかって考えたときに、ロジックは罪深いものであると同時に、タテマエはタテマエだからこそ果たせる役割というものがある、ということも同時に感じました。

というのは、ご質問にこういうものがあったからです。

—「人間のもつ内在する心のなかの差別についてはどう思われますか」

こんなこと聞くな、そんなこと聞いてどうするんだって、まず思います。というのは、この人はもう答えを予想しておられるからです。どんなにマイノリティの立場から差別をなくせといっても、差別がひとつひとつなくなっていくとも、また別の新しい差別が生まれるだけでしょう。あなたが解放されたら、今度はあなたが別の人を差別するだけでしょう、人間の心のなかにある差別なんて未来永劫なくならなくて、それが人間ってものでしょうって答を、たぶんこの方は想定しておられるのでしょう。

けれど、私はこう思っています。もしロジック、つまり論理やタテマエというものが影響を及ぼすことができるとするならば、それは人間の内面についてではありません。人間が心のなかで何を感じているか、他人にどんな憎しみや差別を感じているかなんていうことを、私たちはどんなロジックによってもコントロールすることはできません。ロジックにできるのはせいぜいタテマエを変える——例えばセクハラという概念の定着に

よって起きたように、「あんたがどんなスケベ心をもっていようが、口に出すとヤバイぜよ、気ィつけエヤ」ということを示すことができるのがロジックというものです。ですから、現に加藤さんがこの本のなかで極めて克明に論証しておられるとおり、同じ現実に対しても、つごうのいいロジックとつごうの悪いロジック、そして隠しておかねばならないロジックっていうものも当然あったわけですね。歴史にあらわれるロジックには、そういう情報統制を伴っています。そうなると、表には出せないホンネというものもあって、ロジックにはホンネを変えることはできないが、少なくとも表には出すなよ、言うときは気をつけろよ、というぐらいの効果を、ロジックっていうものももってきたようにも思えます。加藤さんは、ロジックの限界と効果の両方を同時に示されたのかなというふうに思いました。加藤さん、何かご意見はございますか？

## 論理より文学、美意識と戦争の記憶

加藤　私がお2人の意見をうっとり聞いているときに、なんで質問用紙をチェックしているんだ、この人は、とか思いましたが…、「笑）ありがとうございました。いまのお話、面白かったのですが、人間の内面についてはやはり何もできないんだ。建前を変えるところで機能するとおっしゃったのは、たぶんそのとおりで、これは姜さんに投げ返したいんですが、『挑発する知』のなかで私が最も面白いと思った部分は、この指摘ですね。「日本という国は」なんて言い方するとあれですが、文壇というのがこれほど商売になる不思議な国だということなんです。つまり『太閤記』や『宮本武蔵』が1000部単位で読まれるけれども、森さんと姜さんの本だって10万部単位で売れそうですけれども、とにかくなぜか大衆文学のかたちだと売れるし影響力が大きい。こうも書かれています。「歴史というものは美的に解釈されると刹那として消え去る」と非常に格好いい文章で書かれています。心の内面には、本当はロジックは触れられないけれども、やっぱり日本の戦前までを考えると文壇の一部に『宮本武蔵』なり『太閤記』なり、これらはものすごい影響を与えていて、そのロジックが到達しないところをふつつかんでいるのではないかなというご指摘だと思って、すごくこれは面白かったですね。

というのは、私は橋川文三の著作集の7巻ぐらいを読んでいたときに、

丸山真男さんがこう指摘していたんですね。本当は保田与重郎とか筧克彦とか、こういういわゆる浪漫派とか「神ながらの道」のような人たちを戦後、公職追放する。その教職追放審査委員会の席で、特に筧さんは法学部の先生だったのでしょうか、その人が戦時中にしゃべった言葉をチェックしようとすると、じつにおおらかな言葉らしいんです。つまり「神ながら」の雰囲気というものがなんともいえずおおらかで、つまり時局論を書いていないのでチェックしようがない。つまり10項目ぐらいこれはおかしいというような、時局に便乗し学者としての説を曲げたというような項目でいうと1個も引かからないのですね。だから筧さんは結局教職追放にできなかったというようなことを丸山さんは言っていて、おそらく保田与重郎も結局似ているのではないかというんですね。ということは、『太閤記』や『宮本武蔵』というようなものが、ロジックと一緒につながりながらすごく動かしていたんじゃないかと思います。

実例を一つだけあげますが、大本営の作戦部長、第一部長で本土決戦を事実上決めた宮崎周一という人の日記がいま刊行されています。それを見ますと、面白いのは、いろんな情報の最高機密が書かれている途中で、ふっと忠臣蔵とかが書いてあるんですね。あと、これでやられたらまさに大阪の冬の陣だっというふうな、そういう比喻で自分も説得し、まわりの人もたぶん説得したであろうところがふっと出るのは。だから、あっこれは姜さんに教えなきゃと思ってメモ取っていたんですが、いかがでしょうか、その建前につながるかどうか…で、どうぞ。

姜　加藤さんからその指摘があるというのは非常に意外ですね。それがいちばんぼくの言いたかったことで、なぜそうなのかというのは、最近出した『在日』っていう本のなかに書いたんです。

ぼくは歴史の問題が出るときに、いつも思い出すんです。小学校のときに、あの時代、熊本の辺鄙なところでしたけれども、野犬が徘徊してまして、保健所から人がきて野犬を針金で首を引っ掛けて取っていくんです。それを小さいわれわれは非常に怖くて、ぼくは犬が好きでしたから。そういう人たちをあの当時は「犬殺し」と言っていたんです。非常に差別的な言葉であると同時に畏敬というか畏怖もあった。その人の名前はイイジマさんという人でしたけれども、5年ぐらい前にもう自分はそういう仕事を

やめたんだけど、ぼくの家に来ると、犬が逃げていくのですね。そのとき彼が、いやあ、やっぱり犬はよくわかってるなあなんていうこと言っていたんです。ちょっと彼が酒を飲んでいるときに、ぼくは小学校3年ぐらいだったと思うんですけども、要するに中国で何人も若い女性をいたぶって殺したと…。大人がこんなことを言うというのかと、ぼくは非常にびっくりしました。いまでも約40年以上にわたって覚えているわけです。それが彼にとっては、なんか苦笑しながらもバツが悪そうな、非常にシークレットにしたいんだけど、酒の酔いのなかでもののふ的に出てしまっているような感じですね。ぼくは意外と普通の兵士といわれている人が、そういう戦争の肉感的な、身体化された記憶をもっていたのではないかと思うんですね。

### 「美学的な戦争の思い出」語りと政治的現実の貧困

結局それは、贖罪意識は当然ないわけですけども、だからといって逆に尊大な自己肯定もないんです。何かこう大東亜共栄圏をつくるとか聖戦であるとかという、そういう仰々しいような夜郎自大的なロジックもない。それでどうなるかっていうと、結局酒を飲んで、いわば酒のなかに流れていくわけですよ。一つの思い出として追想されるというか。おそらくそういう体験をもった人々がたくさんいたはずで、そういう人々の語りというのはなかなか戦後の日本のなかでは、ぼくが思ったのは思い出としての歴史みたいなもの、それはやっぱり水に流すとか、結局いろいろあったけれども、それが一つの思い出だという。これはかなり美学的な発想なのではないか。文学とか美学的な意識というものが、戦争とかそういう問題を考えていくときに、非常にマイナーでマージナルにしか考えられていないんですけども、意外と人間の情というのかな、そこで琴線に触れる。

これはドイツのある哲学者が、要するになぜドイツで哲学がはやったかという、それは市民革命をやってないからだ。市民革命をやってない国が観念の世界で革命をやった、だからドイツ哲学があれだけ隆盛を極めたのだ。それは政治的な現実の貧困の反映だという。

ぼくは、これは非常に暴論かもしれないんですけども、ドイツにおける哲学に値するものを日本でさがすと文学なのではないかなと思っているんですね。考えてみるとわれわれ一応こう人文社会系で、どんなに頑張っ

でも文学賞で本は売れないんです。日本ほどいろんなオーソリティのある文学雑誌があって、いろんな賞があって、それがこれだけ評価が高い国っていうのはどうなのでしょうかね。韓国を見ても、韓国は詩のほうがどちらかというと日本以上によく評価される国柄ではありますけれども。こんなに地方に至るまで文芸誌があって、またいろんな賞があって、芥川賞をもらえば大スターになるような国というのは、ぼくはそうはないのではないかというふうに勝手に思っているんですね。

上野 姜さん、できれば今のお話を戦争に結びつけてください。

姜 はい、わかりました。だから要するに、戦争についての記憶というものが、ある種文学的なフィルターを通じた思い出として語られていくような、そういう構造というのがやっぱり戦後もあって、戦時期においてもやはりそういう文学、もしくはそのコロラリー(注)としては漫画もそうだとは思うんですけども、そういうものというものが、やっぱり人々をかきたてるという意味では、かなりもう少しそういう問題を、ぼくはやっぱり検討したほうがいいんじゃないかというふうに、ぼく自身が言いたいことはそこですね。

上野 おっしゃるとおりですね。私がさっき、自衛官に万が一何らかの犠牲があったらと怖れたっていうのは、姜さんの言葉を使えば「犠牲の美学化」というのが日本ではかたんに起きてしまうだろうと予測するからです。死者に対しては、批判を許さない、問答無用の美学化というものが起きてしまいます。文学を含むその美学化のなかに、漫画も入るとおっしゃったので、わが意を得たりという気がしました。自衛官の犠牲を、ただちに小林よしのりが漫画化しちゃうかもしれない。小林よしのりの『戦争論』(注)の帯に、こんな文句があったのを覚えていらっしゃるでしょうか——「戦争行きますか、それとも日本人やめますか」。この脅迫に、女もまた乗せられてしまうかどうかが問われていると思うんです。

姜さんのお手元にあるたくさんのご質問に、いくつかお答えいただかないと、聴衆からたぶんご不満が出るんじゃないでしょうか。

(注)コロラリー——corollary 系、推論系列

(注)『新ゴーマニズム宣言スペシャル 戦争論』——小林よしのり、幻冬社、1998

姜 「北朝鮮」について少しお話ししたいんですが、結局さっきの加藤さんの発言と関わってくると思うんですけども、外交というものが、ぼくは、この1年以上にわたって事実上機能してなかったのではないかと。外務省の後援の場でこういうことを言うのもなんですが。(笑)

上野 いいんですよ、そのために来たんですから。日本の外務省も懐が深いものです。(笑)

姜 7月に川口外務大臣に、ぼくが1時間ぐらい会ったときに、彼女は非常に苦しい立場にあったと思います。いや苦しいという意味は、おそらく日朝平壤(ピョンヤン)宣言(注)自体を認めたくないという考え方は「在日」のなかにもあるわけですね。果たしてそういう文面で植民地時代の過去の歴史の清算が済んでいいのだろうか。本当に、いわば民族的な蔑視とかの差別というものがなくなるようなかたちで、新しい関係ができるのだろうかということに対して、多くの人々はやはり疑念をもっていたわけです。

ぼく自身は、そのこともさることながら、やっぱりここで日朝関係が破綻すると、より戦争が起きやすい関係がつけられるのではないかということを一ばん危惧しておりました。したがって、これは先ほどの批判からすると政治的なリアリズムになりますけれども、だから彼女に言ったのは、外交というのは「ゼロサム原理」ではない、ゼロサム原理なら戦争です。ゼロサム原理である以上これは戦争しかない。だから北朝鮮と関係を結びたいというふうな外交的な判断のもとに日朝ピョンヤン宣言をつくったならば、やはりあの国に出口を示してほしいと。出口を示すということはどれだけのハードルを越えれば出口が見えますよと。

皆さん、ABCD包囲網というように戦前言われましたけれども、日本がああ当時、ワラをもすがる思いで近衛文麿などはやっぱりソビエトにすら仲介を頼んだわけですね。つまり国際的孤立というものが日本にとってどれほど恐ろしい事態かということを示しているわけですよ。なぜわざわざ一つの海峡を隔てて、数千年近くの歴史をもっている2つの列島と半島で100年にわたって満足な関係がなかったのだろうかということは非常にやはりこれは悲しむべき事態で、しかし日本に住んでいると、それは悲しむ

(注)日朝平壤宣言——2002年9月17日、北朝鮮平壤市で小泉首相と金正日国防委員長(総書記)が署名した宣言。「国交正常化を早期に実現」で合意、「日本の植民地支配に痛切な反省と心からのお詫びの気持ち」を表明、「国交正常化後の経済協力」などを記す。

べきものでもなければ、おかしいと思うものでもないわけですよ。しかし世界的に見ると、これは非常に異常な事態です。100年間満足な関係がなかったということです。ぼくはやはりそれを、とにもかくにも外交的にミニマムに最小限度、正常化しなければいけない。人が出入りすれば必ずやっぱり社会は変わっていく。皆さん、1965年に日韓条約の締結があったときに、韓国も日本も反対しました。ぼくたちも学生時代に日韓条約のいろんな問題点を指摘しました。しかしどうでしょうか、いま年間300万近くの人が韓国に行って、向こうから150万近く来ています。40年かかったわけです。40年かかってここまで来たんです。ならば日朝関係も絶対そういうことがないというふうに誰が断言できるでしょう。

### 隣人・相手を見ずに「政治化」する問題

だから、短兵急に回答求めずに、とにかく北朝鮮という国と交渉しなければならぬ。そのいわば嫌だと思っている国であっても、やはりその国と向きあっていかなければなりません。ぼくの学生時代、1970年代は「韓国的カテゴリー」ということをよく言っていました。ドイツへ留学していたときも、いちばん不遇をかこっていたのは台湾と韓国人です。われわれはベルリンに行けませんでしたが、東ドイツも行けませんでしたが。そして韓国と台湾というのは中国と北朝鮮と比べると、現在の北朝鮮と同じような処遇しか与えられていなかったわけですよ。日本のメディアや国民的な世論のなかでも。それがいま逆転しました。

なぜこんなにブレるのかと思います。つまり1970年代は中国万歳、北朝鮮は少なくとも韓国よりいい国だと、大方の人々はそう思っていました。今度は逆転したわけですね。ぼくは、いちばん不思議で仕方ないのは、なぜそんなにブレるんだろうということなんです。ぼく自身は決してブレてないつもりなんです。極端から極端にブレるということに、さっきの文学の問題ではないんですけども、ふだんは非常に政治に関心がない人が、ある一つの情念やそういうもののフィルターを通ると、これが一挙に「オール政治」に変わっていくという、その恐ろしさみたいなのをぼくは感じるわけです。つまりふだん朝鮮半島の問題について考えたこともない、そんな国と交流をもたなくて平気の平左でいいじゃないって人々が、ある問題、事件が起きると今度は一挙に「オール政治」に

変わっていく。それは1970年代の台湾と韓国の立場で生きている人間からすると、よく見えてくるわけです。1970年代、ぼくも台湾の学生と友人になりました。彼らからすると中国大陸は台湾と比べると、台湾は本当に何で台湾なんだと言われるぐらい非常にネガティブなイメージでしか見られていませんでした。

だからぼくが今回の北朝鮮の問題で日本の世論にもう1回考えていただきたいのは、何でそんなにブレるんですかということです。やっぱりブレないで、やはり相手をきちっと見据えて、どうやって対応していくかということが最低限ぼくは必要なのではないかと思うんですね。そうして初めて外交というのは、やはりある種のリアリズムをもちますし、だからこそブレるということはやはり不測の事態が起きる可能性があるわけです。いま北朝鮮と交流をもちなさいということ自体が、これは真に「北朝鮮派」と見られるような雰囲気がこの1年間にありました。そうではないわけです。

そこのところをぼく自身がいちばん言いたいことなんです。ブレるのはなぜかという、それはやはり実像を見てないからだと思うんです。きちっと隣人に対して対応していくことがなければ、不測の事態が起きかねない。だからぼくは、右も左もあってもいいと思うんですよ。この社会には右派がいて、そして左派がいても、これは決して不思議ではない。問題はそのブレです、なぜそんなにブレるんですかということなのです。そのことを少し何度でも強調しておきたいというか、ぼくがいちばん言いたいことはそういうことなんですね。

上野　そんなに180度ひっくり返るようなロジックのブレをつくり出した誰かがいるわけですね。メディアがあり、またそれに便乗した知識人や美学化した文化人がおり、それに説得された人たちがいるんでしょうね。

姜　日本にとってはやはり、さほど朝鮮半島、ましてや北朝鮮には関心がなかったんだと思うんですよ、基本的にはね、関心がなかった。だから50年間も交流がなくてもそれは平気だったし、皆さんにとってつい最近までパスポートに「except North Korea」と書かれていても、その意味がなんなのかっていうことを詮索もしなかったし、1959年から1984年にか

けて9万数千人の人間が、「在日」の人が向こうに帰り、いわゆる日本人妻とされている人が2000人から3000人いたわけですがそれでも、何かそういう問題は結局、公にきちっと議論されてこなかった。

上野　ただ、「9・17」（平壤宣言）以後に「反北朝鮮」として結晶化したナショナリズムが、それ以前にすでにネオ・ナショナリズムのかたちで噴出していたわけですから、はけ口が「反北朝鮮」であれ、あるいは石原都知事のように「反中国」であれ、あるいは「反米」であれ、そのはけ口を求めて、つごうのいいロジックのもとに結晶化されるような動きがあったらろうということは認められざるをえないと思います。そういう動きを一定のロジックやレトリックのもとに誘導していったメディアが現にあったということでしょう。もし加藤さんが将来になって、ただいまの事態を回顧的に歴史研究していただく機会があるとすれば、どこでどういうふうにロジックがいきなり北をターゲットとして結晶化したと言えるだろうか、そういうこともお聞きしてみたいものです。加藤さんへの質問もたくさんきていますね。

加藤　いくつか非常に面白いご質問いただきまして、ありがとうございました。鈴木さんという方から「加藤さんは国のロジックと民のロジックが一致したときに戦争に突入すると言われました。民のロジックというのはあり得ないのではないのでしょうか」ということで、「大新聞や社説などメディアの説に引っ張られて、あおられてしまう民の存在だと思いたが」というのがありました。

これは確かに考えてみると面白いことで、われわれは「民のロジック」という場合に、だいたい反戦論と非戦論の側でしか書いてこなかったわけですよ、幸徳秋水がこう言ったとか、水野廣徳がこう言ったとか。ですからむしろ戦争をしようっていうような民のロジックが、さっきの内田良平とかの例を申しませけれども、これがどうなのだっていうのは確かに問いとして成立すると思いますね。

例えばこの民のロジックと国のロジックが一緒になるはずなのに、あれ齟齬しちゃったよというような例で——お答えになるかわからないんですが、斎藤隆夫という民政党の帝国議会議員が戦前おまして、その彼が昭

和15年に質問したことは、日中戦争で近衛政府が賠償金を取らないというようなことは本当にナンセンスだということかたちでの批判をした。ですから政党人が、つまり国家はこのまま戦争に行くのかというふうに袖を引いたというよりは、戦争というのはしよせんカントが二百何年も前に共和的な政体をつくればなくなるといってもずっとなくならないんだと。数十年前には幸徳秋水が日露戦争直前の国民をとらえて10年前の苦勞を忘れてしまったのかと言っても忘れていた国民がいる。だから中国との戦争でアメリカとの中立法があるからといって賠償金取らないなんていうのはおかしい、土地を取れ、賠償金を取れということかたちで政府、そして軍を批判するわけですね。

帝国議会議員が民とは言えないとは思いますがけれども、やはり日中戦争と太平洋戦争のあいだの日本の戦争の仕方は非常に不安定で、事実の問題としてやはり中国の抵抗も非常に強いですし、日本から動員されたのがなかなか現役兵中心の軍隊ではないというので死傷率が高い。20万人ぐらい、太平洋戦争が始まるまでの時期に亡くなっています。ですからそういう国民の士気について、やはり戦争というのは占領地を取るためにやるんだ、覇権国家化するためにやるんだとなぜ言えないっていう、こういう問い返し方ですね。民と国の士気が？ ずれて、そのずれに政府の側が非常に困るという事態はあったと思います。

ですから、この反省にたって、おそらく政府は太平洋戦争の前には大風呂敷を広げずに自衛なんだというようなかたちでやっていたのではないか。だから影響——プラス、マイナスはわかりにくいですが、民のロジックが国のロジックに与えて齟齬を起こしたときに非常に面白い、面白いという言葉は不謹慎ですけども、事態になるっていうことはあったと思います。

それと伊藤さんのご質問で、「明治期、昭和期、ならびに今日の国民の形態の変化を見なければ『いつか来た道』を繰り返すことになると思います。つまり戦争の形態の変化、先ほど上野先生が、国家は国民が行う最大の事業だということで結びつけてくださいましたけれども、国民の形態の変化を見なければ「いつか来た道」を繰り返すということですね。これは私が落としていた論点だと思います。このことといまからお話することがつながるかどうかちょっと不安なんですけれども——。

私は「いつか来た道」で歴史を見るのは駄目だよと言いましたが、実際のところいま政府が、例えば有事法制とかを準備する際に、非常に前近代的な戦争の形態というのでしょうか、戦車で上陸するような国が今後の戦争にあり得ないときに、どうやって自衛隊の車を優先させて通すかっていうようなことを議論する戦争のイメージがあるのはなぜかを、私は考えたんです。そうすると、むしろ国民の側も「いつか来た道」というのはちょっとおかしいかなって見えても、政府の側がその準備するにはこんなことになる。政府のなかで、防衛庁のなかの制服組とか外務省は実はどっちかという新しい戦争のイメージに追いついていて、国家公安委員会とか警察畑の人たちが入っている委員会などで国内戦のときにどう自衛隊を動かすか、米軍とどう協力するかというときにイメージされているのは、実は沖縄戦と、あとは未完に終わりました本土上陸作戦への準備作業です。ですから、先ほど義勇軍のお話をされましたけれども、昭和20年の6月ぐらいに本土決戦準備ということで地方総監府というのをつくるんですね。つまり軍以外のことはもうその地方総監府というところで全部オーダーを出して、大蔵省にもいままで県はおうかがいを全部出していたけれども、もううかがい出さなくてよろしい。県の枠を取り払って道州制という声もいまありますけれど、とにかく地方総監府が軍事以外のことをやる。ということつまりそれは端的に言えば、戦線の、内務省の巨大な地域化ということになると思うのです。そういうのを例として、やはり政府が考えている現実があります。ですから国民の形態の変化ということであれば、やはりその政府が何を過去の事例として「いつか来た道」で理念化しているかというところを国民からチェックしていくことはすごく大事だと、私は感じていますね。

## 「政治主導」強調の危険

きょう言おうと思って新聞記事をチェックしてきたのですが、『朝日新聞』の1面に1月9日の記事だと思いますが、防衛庁の制服組——幕僚幹部など制服組の人たちを前面に押し出してくる、国会に出させる考え方があるそうですね。いままで実は、防衛庁のなかでは内局、制服組、つまり文官と海上幕僚幹部はかなり政策が違ったんですね。これは綿密に研究した研究書があるのですが、それでも、「イラク特措法」でいくかそれとも「周辺

事態法」でいくかというときに、やはり幕僚幹部プラス外務省が、制服じゃない文官の内局と対立する図式ができる。つまり外務省と防衛庁——外務省と軍部というのは戦前、唯一対立したのですが——むしろ外務省と制服組の幕僚幹部の側がある種「特措法」でいこう。内局のほうは「周辺事態法」でいこうというような、やはり対立があったそうです。つまりこういう不思議な戦争にどう対応するかという組織のつくり方で対立をしてきた人たちの、どちらかという内局側つまり文官の側が後景に退いて、幕僚官僚みたいな人たちが出てくるということは、やはり一つの変化です。上野さんの問いにあったこと——私がいまの時点を、例えば20年後生きていて書くとすると、おそらくその点はかなり大きなターニングポイントになると思います。

石破防衛長官がその説明で、われわれは文官とか武官とかで分けていたのではない、今後の戦争は政治がリードするという言い方をするのはいいですね。「政治」って言葉はすごく便利で、文と武はどちらもそうなんです。これは私の細かい専門的な論文に書きましたけれども、戦前にも実は大本営を改革するというときに、政府の側や議会の側がやっぱり軍に引きずられる大きな要因は、じゃあ大本営に政治家も入れましょう、大本営を政治的に改革しましょう、政治が統帥を支配していいんですよというような言説が通るんですね。だから政治っていうのは文と武で分けるところではあまりなじまない考えだけれども、実はそこで通してしまうということがありました。だから、石破さんの政治が戦争を指導するんですっていう言い方は、非常にリスクだと私は思っています。

上野 私もご質問をいくつか受けております。あとで姜さんにもお答えいただきたいと思いますが、最後は国家というものをどう考えるか、国家って超えられるのかどうかということを考えてみたいと思うんです。私の生命と安全を守るために国家という統治組織と契約を結んだはずなのに、その相手方が「そのためにお前は死ね」と言う。これは本末転倒です。小林よしのりの「戦争行きますか、それとも日本人やめますか」が脅迫になるのは、日本人をやめたら生きていけないと思う人たちにしか通用しません。日本人なんかやめたって平気だよって言っちゃえば、それっきりのことです。自分の生命と安全を守るために結んだ契約のもとで、自分の生命と

安全を危険にさらさなきゃいけないのだったら、こんな契約破棄するよ、そこまであなたと約束してねえよって言ったらどうなのか。そういうことを言う権利は、私たちの側にないのかと思うんです。そこで私がやっぱり思い出すのは、あの敗戦の青い空——見ていませんよ、私は生まれてないから見てないけれども——日本が負けたときに、女を含めて日本の庶民がとことん味わったのは、国家があって国民があるなんてとんでもないや、国がなくても私は生きていくっていうことだったのではなかったか。日本人は、どうしてそれを忘れてしまったのだろうと思うんですよね。

それを前ふりにして、いただいたご質問のいくつかに答えたいと思います。

### 「国民」集団の利益と個人利益が一致するという妄想

「マイノリティ共同体のナショナリズムは抑圧者のナショナリズムと同じように危険だと思いますか。それはなぜですか、ナショナリズムを否定するとしたら弱者はどういうふうに生きろというのですか」というご質問がありました。私は抑圧的な暴力も対抗暴力も、どちらも暴力は暴力だと思いますし、帝国主義ナショナリズムも対抗ナショナリズムも、ナショナリズムはナショナリズムだと思っています。ナショナリズムって何かと言うと、国民という集団の利益と自分の個人利益が一致するという妄想のことですね。私が先ほど加藤さんにさしあげた質問のうち、3つめの質問を加藤さんは避けられましたが、その質問というのは、加藤さんが「国民」とおっしゃるその「国民」は一枚岩ですかっという質問でした。国民のなかには、立場の違いや利害の対立があります。「あなたの利益と私の利益は一緒じゃないよ」という人たちがいれば、国民が一枚岩にまとまるわけがないので、ナショナリストが考えるように国家や国益がひとつにまとまらなきゃ生きていけないかという、そんなことがなくたって生きていける。それならまとまらないならまとまらないままで生きていける、そのためのさまざまな方途を考えるのが知恵というものじゃなかろうかと思うんですが。

今の質問に関連して、もう一つこういう質問もあります。

「戦争になると敵味方同士の国籍をもつ二重国籍者の処分が問題になる」——「処分」と書いておられる、すごいですねえ、「処遇」じゃなくて「処分」なんだ。太平洋戦争時の日系米国人とか、アフガニスタン戦争時の米

国在住のアフガニスタン人とかが、そういう例にあたるでしょうか。戦争って国家が主体となって行う事業ですから、二重国籍、もしくはハーフというよりダブルだったら、私の半分と私の半分が殺し合いをするわけにはいきません。だったらしょうがない、そんなことできないから、戦争なんてやめようと言うしかないじゃないですか。

1940年代当時よりもいま、私たちははるかにグローバリゼーションのもとでヒトとモノと情報の移動にさらされています。隣町に行くみたいに外国に行きますし、外国人のお友達もいっぱいもっています。国単位で考えるなんてやってられないよって思う。私の解決は、二重国籍者をもっと増やそう。二重どころか三重とか四重、国籍コレクターになろうというもの。そうなれば、敵と味方に別れて争うことも減ることでしょう。

もう一つとっても面白い質問がありました。

「自分は無意識のうちであったと思うけれども、抑圧者になることを拒否していました。その結果、負け犬になりました」。(笑)「とすると、負け犬であることはとても高尚な生き方ではないでしょうか」。かっこいいですね。先ほど加藤さんに、日本近代の戦争のロジックを領導してきた隠れた動機ってというのは覇権国家への欲望だったんじゃないかとお聞きました。こんな欲望を捨てればなんてことない、別に一流国にならなくていいやって思えば、そこそこの生き方も可能です。

今は護憲って唱えても守旧勢力にしかならないので、改憲とか憲法の選び直しは、どの勢力にとっても避けられないという状況認識が生まれてきました。大塚英志さんが「中央公論」という媒体をつかって、「夢の憲法前文」を公募したところ、それに10代から80代までさまざまな読者が応募して、それをまとめたとても面白い本(注)が出ています。そのなかでイチオシというかグランプリをいくつか選んだのですが、私も審査員をつとめました。私のイチオシはこれです。17歳の女子高校生の書いた「私の新憲法前文」は、こういうものです。

「全くもってタイシタコトのない 世界的にみてソコソコの国がいい」

もし明治の人が、あるいは大正、昭和初期の人たちない、そこそこの国がいい」と思ってくれていたら、その後の日本史は違ったものになっていたでしょう。思っていた人はいるんですよね、石橋湛山さんでしたか…、いないことはない。だから国家のロジックに対抗する対抗ロジックはいつ

(注)『私たちが書く憲法前文』——大塚英志編著、角川書店、2002。「中央公論」で2001年から02年「〈読者参加型企画〉夢の憲法前文をつくろう」をまとめる。姉妹編に『「私」であるための憲法前文』大塚英志編著、角川書店、2003

でもあったわけですが、それが多数派を占めることはありませんでした。ところが、21世紀に入って少子化とデフレ・スパイラルの日本には、もはや「大国妄想」を捨てていただくほうがよい。「たいしたことのないそこの国」というロジックで、国民が説得できたらいいですね。

国というのは、私の人生のただのパーツ（部品）であって、そんなものに私は命をあずけてねえよって言えるし、言いたいと思うんですが、これについて姜さんと加藤さんに、それぞれお話をお聞きしてフィニッシュを決めたいと思います。いかがでしょう。

## 人びとが出会い、国家の比重が低くなる道を

姜　むずかしい質問で…。いずれにせよ、大衆的な願望やエネルギーというものが国家という姿をとって表出されるという、そのことがやはり避けられない事実というものがやっぱり一方であることは間違いないわけですね。だから結局、ぼくは先ほどの「北東アジア」という問題に行き着いてしまいましたけれども、ぼくなんかは少なくとも朝鮮半島と日本は1日経済圏になりうるのではないかというふうに思っていますし、やはりできる限り国の境界のインターフェイスを増やして、人がそこでいろんなかたちで出会うということをやっていくしか方法がないわけですね。

去年、金大中（キム・デジュン）氏と会ったときに彼が世論調査の話題を出した。そのなかで、これは間違いじゃないかと誰もが言っていたんですが、韓国でいちばん好ましい国は国の単位で日本になっていたんですね。2番目が中国で、3番目が北朝鮮、4番目がアメリカでした。おそらく一つ一つそういう不信感を解いていくしか方法がなく、これはやっぱり時間がかかるわけです。韓国で「親日」時代の協力者を摘発する法律(注)が今回通りましたけれども、おそらく韓国でもいろんな意味で過去との決着がまだまだつかない状況のなかで、しかしそれでも、韓国と日本とが戦争状態に入るということはまず想像できないと思うんです。

だからぼくの答えは非常に簡単で、やっぱりいろんな意味でインターフェイスを増やしていくしか方法はない、そして人と人が出会うしか方法がないというか、それによって国家というものの重力がだんだんやっぱり軽くなっていくのではないかと思うんですよ。非常にシンプルな回答ですけども、そういうふうに思います。

(注)親日究明法——2004年3月2日、韓国国会で「親日反民族行為真相究明法」が通過

上野 トリは加藤さんで締めましょう。

加藤 いえ、いえ…。先ほど、国敗れて女性は残るとか、国敗れて人材ありというか、太平洋戦争が終わったあとに女性がすごく外のアメリカとか、私はアメリカしか知らないんですが、図書館などですごく優秀な女性が働いていらっやって、キュレーターなんて仕事をやっている方はやっぱりGHQの兵士として来た方と結婚してあちらでという…。やっぱり「国敗れて人材あり」という感じを思い出します。それをなぜ忘れてしまっているのかというところの、先ほどの上野さんの問いかけはすごく深くて、やっぱりわれわれはいろいろなことを忘れているんですね。例えば戦前も何で徴兵忌避ができなかったんですかと聞くと、端的に言えば村で共同体で、自分が逃げたら家族がいじめられる、…そうですよね。

ただど一方では明治期には夏目漱石——漱石という名前の一つの音の由来がそうじゃないかというのは丸谷才一が言っていて、「籍を送る」というものです。北海道と沖縄は、しばらくは徴兵忌避者が本籍を移す対象地だったわけです。実際のいまの研究では実は徴兵忌避者というのはものすごく多くて、炭鉱であるとか、網野史学(注)じゃないですが、農民じゃない人々がたくさんいる世の中ですね。鉱山で働く人やマタギもいますし、そういう実は自由に動いている人たちがいたんです。だから戦前における共同体の縛りのきつさと、その自由な動きという部分が実はあって、その2つとも戦前である。

だから、その2つを両方、われわれは引き継いで戦後を生きなきゃいけないわけですが、ただ、先ほどの「国民は一枚岩なのか」と言ったときに、先ほど負け犬だから高尚な自分と思えるところまで高みにいった女性は、私はすばらしいと思うんです。でも私はやっぱり、戦前の支配でもわざと朝鮮に志願兵制を与えて日本人より日本人化した人たちを喚起させる、その立場の差やその人のもっているいろいろなものの差を利用して差異化する試み、そういうドライブは帝国という仕組みのなかではやはりあったと思うんです。ですからいま帝国という仕組みはないんですけども、逆にユビキダス(注)というようなことになっていくと、国家は逆に望郷の対象というか、なんかそこだけにはいたいよね、みたいのがあるのかなという感じもいたします。非常に雑駁なことですみません。じゃあ最後、まわします。

(注)網野史学 網野善彦;あみの・よしひこ——1928～2004 歴史家。日本中世史、日本海民史。『日本中世の非農業民』『無縁・公界・楽』『異形の王権』『蒙古襲来』『日本社会の歴史』『「日本」とは何か』『「日本」をめぐる——網野善彦対談集』

上野　いやあ、これできれいにフィニッシュが決まりましたね。日本軍隊史の専門家であらっしゃる加藤さんのお話で、知的水準の高い戦前の甲種合格者の兵士たちが、国の論理と民の論理が一体化するような使命感を帯びていたというご証言があったその直後に、たったいまご自分の口から、徴兵忌避者の系譜を熱い言葉で語ってくださった。国民が一枚岩ではなかったというお答を、私の問いに対して最後に見事に返してくださったので、たいへんうれしい思いです。

それでは、いちばん最後にもう一度、マイノリティを待ち構えている「国民化」の罠についてお話して、終わりたいと思います。「おまえを一級国民にしてあげるよ」という悪魔のささやき、それに女のみならずさまざまなマイノリティが動員されていくわけですが、こういう悪魔のささやきにのせられて、ゆめゆめ総合職で過労死などなさいませんように。命より大事な会社や国家など、どこにもありません(笑)。…きょうの話は、戦争を語りながら実は私たちの日常の問題でもあるというところで、終わらせていただきたいと思います。どうも、きょうはありがとうございました。(拍手)

「基金」山崎　たいへんお疲れさまでした。約3時間、本当にどうもありがとうございました。そして参加者の皆さん、4階会場の皆さまも、本日はお忙しいなか、どうもありがとうございました。パネリストの皆さまに改めて拍手をお願いいたします。(拍手)

これをもちまして本日のフォーラムを閉会します。どうもありがとうございました。

**ユビキダス**——ラテン語で「いたることにある」という意味。全ての情報機器がネットワークで結ばれいつでもどこでも情報の交換や伝達ができる環境を「ユビキダス・ネットワーク社会」と呼ぶ。



## レジュメ

東京大学大学院人文社会系研究科 加藤陽子

1. 『戦争の日本近現代史』を書いた時の気持ち
  - ① いつか来た道、二度と過ちは繰り返さない、という言葉
  - ② 山口定『戦争責任・戦後責任』
  - ③ 丸谷才一『雁の便り』
  
2. 戦争に踏み出す瞬間を支える論理を考え抜いておくことの意味
  - ① 開戦経緯を外交史料からみると
  - ② 開戦経緯と開戦そのもの間には、飛躍あり
  - ③ 開戦までの政治経過と、開戦そのものを支える論理との大きなギャップを一瞬で埋める論理や心理がある
  
3. 為政者や国民が世界情勢と日本の関係をどう捉えてきたかを考える前提
  - (1) 当時の外交思潮はどうであったのか
    - ① 政府の外交思潮  
 現実主義 攘夷論を煽って討幕を成し遂げた明治政府の為政者 攘夷は「古来の仁義の道」に背く 万国公法 国民への外交情報開示
    - ② 国民の外交思潮  
 近代的政治意識 国際法に対して「道」の教えに従うごとく従順であればと明治政府が国民に説く(吉野作造) 自国と外国との国際関係についての省察から生み出された 不平等条約など国際関係の不正常な状態に敏感
    - ③ 民権派の外交思潮  
 条約改正を実現し国権を恢復するための国会開設 あるいは共同体の結束力を培う軍事力・国力をつけるための国会開設 普通選挙期成同盟会は三国干渉を契機に結成 普選を要求する理由がこうした外交事由であったこと

(2) 「国家の元気」は対外態度にどう影響するか

① 征韓論を主張した西郷隆盛 教科書的な理解

② 不平士族の発刊していた雑誌～「法律は一公議輿論で決められるべきであるのに実際の政治は2、3の有司によって専制的に運営されている。よって、国会を開設して、立法の大権を人民の手に掌握して、法律を本当の法律にしなければならない」

西郷の考え方 幕府が滅亡したのはひたすら攘夷の戦争を避けるという「無事」の追求に終始したから 現在の政府も同じ 「物好きの討幕」維新当時のような国家の元気を取り戻し国家の覆滅を回避する道としての立憲と征韓

③ ではなぜ征韓なのか 「御一新之御主意」 武家政権と「私交」を結んで天皇への朝貢を怠った 名分を正す 「討幕の根元、御一新の基」 国家の元気を失ってはならない

④ 征韓論 文明開化を肯定しない国に対する侮蔑の念ではなく、みずから救われるかどうかという感覚 御一新が完成できるかどうかという感覚で対外侵略がなされようとした点 国内改革と対外侵略を一体のものとして考える態度 国内改革の必要性への危機感⇒国内政治に問題がある国には干渉できる、という思考回路が発生する

⑤ 大阪事件1866年5月 大井憲太郎 大朝鮮国 事大党 開化派の独立党政権樹立

日本国内の改革も準備 「我々は国を取るものにあらずして彼の国を強めてヤル者」「普通の戦争の如く其国に対するのではなく「一部分の奸党に対する」闘いだから、一時的には混乱が起きて「朝鮮の大不幸なるも我々の計画より生ずる結果は安寧幸福にある」との確信

⑥ 福澤諭吉「日清の戦争は文野の戦争なり」(1894年7月29日)～「清国の如き腐敗政府の下に生れたる其運命の拙なさを自から諦むるの外なかる可し」

⑦ 吉野作造「露国の敗北は世界平和の基也」(1904年3月)～「吾人は文明のために又露国人民の安福のために切に露国の敗北を祈るもの也」⇒満州国建国、江兆銘政権樹立の正当化の論理と同じ。張学良政権の圧制に苦しむ東三省のひとつとを救う、蒋介石政権の圧制に苦しむ華北・華中の一ひとつとを救うという図式、

4. それぞれの戦争
- (1) 満州事変
- (2) 日中戦争
- (3) 太平洋戦争

## 参加者アンケート——抜粋——

▽戦争という言葉は、日本人にとって禁句のようになっている。今回のように、もっとオープンに討論できるとよいと思う

▽期待通りでした。

▽モニターや音声がよく、助かりました。時間の延長もうれし〜。もったいないから、このトークをネットで配信してほしい。

▽はじめの3人のお話が少し難解でした。第二部のやりとりの方が興味深かった。「ロジック」は後からついてくる、という指摘。姜尚中さんのハートある語りがすばらしかった。加藤さん以外の方のレジュメもほしかったです。

▽また対話型のものをつづけてほしいです。

▽スリリングな話が聞いて面白かった。

▽参加した理由は顔ぶれにひかれてである。アジア女性基金ということは全く気にしないで来ました。社会学者、歴史学者、政治学者のさまざまなまなざしがぶつかりあって、小さな人文社会の世界がそこにはありました。日常が何なのかを考えることは方法が一つではないし、たくさんの人がこの地球にはいるということが何よりも面白い事実ではないでしょうか。

▽私も、娘も息子も戦争には行きたくないし、行かせない。国家と個人、マイノリティー…。日本人から降りるしか具体的にできることはないのかな？ と思います。

▽30代の女ですが、小学生の時から大学生まで授業などで社会の仕組みなどを学んできたと思っていたのですが、9・11の事件以後、もう一度自分の目で社会を学び直したいと考え、このフォーラムに参加しました。3名のパネラーの先生方のお話、とても参考になりました。またこういった会をもうけていただけるとうれしいです。あっという間の3時間だったので、もう少しお話が聞けたらと思いました。

▽アジア女性基金のフトコロの深さがわかりました。

▽参加できて、とてもよかったです。これからも「戦争」について学び、考えていきたいと思います。

▽非常におもしろかったです。ふだん、思考することをしていないので、カンフル剤になりました。

▽知らないキーワードをたくさん聞きました。ありがとうございました。  
▽姜さんの冷静沈着な発言と、上野さんの活発、挑発的な丁々発止のやりとりで、あっという間に時が過ぎました。改めて、世論の基軸が右に動いている中、頭の中で漠然としていたさまざまな分野の断片的な情報が結びついたような気がしました。

▽テーマがよいので、ながくつづけてください。

▽戦争体験者の加害者としての男性が、なぜ目の前につどうことができるのか、どんな気持ちなのかわからなかったけれど、姜さんの「日本の美学のフィルターを通して」の話で少しわかった。昨夏「家族だれにも話せないできた、このまま墓までもっていこうと思った。でもイラク戦争の始まりそうな今、議員としてのあなたに聞いてほしい」とのことで、生々しい中国での戦争加害者体験を聞いた。また、38度線を越えた女性のみた怖い体験も聞いた。…意味のあるフォーラムだった。

▽明快に挑発する上野氏、面白かった！ 細やかに文献から見ようとしていく不思議な、まじめな加藤氏。誠実に話す姜さん。大変、有意義でありました。そう、気楽に「いやだよ」と言い放ちたいところです、国に。私は公務員という仕事なので、一つの命題から10のまったく違う結論がリーズナブルに導かれる不思議をよく感じます。官とはそういう商売なのです。官のロジック、民のロジックの話、面白かったです。

▽3人の意見がどうかみ合うのか、本当に真剣に聞き入りました。私は小学校の教師ですが、国語の中にある物語は、戦争に巻き込まれたという責任のないものがほとんどです。こんなふうだったから、日本には庶民として生きていることを忘れたのではないのでしょうか。とても参考になりました。

▽予定調和的でない、熱い討論を聞くことができ、うれしく思います。いかにして「国家」という枠に押しはめられことなく、個と個が、ともに生きる社会をつくれるか？ いま、切に要請されているのだと思います。

▽姜さんのお話、前半も後半も、重い内容と現実と斬り結んで導き出された思考が伝わってきました。観念や知力のもてあそびでない思考に好感。  
▽お話はたいへん興味深くうかがいました。第二部の上野さんの司会進行役はとてもよかったです！です。姜氏の発言「なぜブレるのか」。もっともっと考えたいです。

▽非常に現在の見える問題、見えにくい問題が表出してくる展開に、すいこまれていくようでした。

▽3人の方それぞれのコメントに特徴があり、なるほどと思う部分がたくさんありました。とくに姜さんのご意見は共感を覚えますね。上野さんのするどい指摘、加藤さんの歴史から見る日本、姜さんの体験を含めたコメント…ほんとうに貴重なお話でした。みなさまのお話を糧として、これからも自分のやるべきことやらなければならないことを深く考えていこうと思います。このフォーラムを開催してくださったことに深く感謝します。有料でも参加したいフォーラムでした。

▽時間が短くて残念。会場はよかった。盛りだくさんでメモをとるのがたいへん。もう少しレジュメがあれば助かります…。

▽姜さんのお話をじっくり聞きたくて参加しました。よかった。上野さんの本を初めて読み、びっくりしました。加藤さんの近現代史は自分たちの弱いところで、とても理解しにくい本でした。ただ、重要なテーマであることはわかりました。掲示板のおかげで、3人の本を読んでから参加したので、話に入りやすかったです。

▽アジア女性基金への批判も含めたフォーラムを開かれたことに、敬意を表します。後半のパネルディスカッションでは、多くの視点を得られ、また再確認できたのはありがたかった。

▽大変有意義でした。パネリストの選択が素晴らしい。

▽日常的な問題にまで関連づけて考えられていて、3人の話しぶりがとてもよかった。

▽イラクへの自衛隊の派遣もある現在、女性の視点からその危機を語ってほしかった。歴史を再確認するのも必要でしょうが、「いま」をもっと話してほしかった。「女性と暴力」またマイノリティーの人々にとっても。

▽学者の討論らしく論理的でしたが、具体的な展開に欠けていたように思います。自説にこだわらず、もっと3人が話を広げていければよかったと思います。知識は人を説得できない。戦争の犯罪について、もっと話してほしかった。

▽3人の方のお話には、「目からウロコ」のものと「ああ、やっぱり」の両方があり、疑問に思っていたこと、気づかずにいたことも気づかされました。「戦争」はフェミニズムが包含する広範な問題のひとつでしかないのか

もしも戦争を食い止めるのは「家」「家族制」を解体し家族のあり方を考え直す日常の中での思索の中にあるのかもしれませんが。

▽たいへん勉強になりました。入りきらない人のために、9階と4階に席をもうけるなどのご配慮が大変うれしかったです。

▽講師の方々の人選がすばらしい。女性基金の立場に反していても堂々と発言するパネリストもよいが、それを踏まえて依頼する「基金」にも好感が持てる。帰属意識という言葉があるが、自分が属している集団、日本人、既婚者、母親、労働者、個人、etc. 私は何より女性です。

▽人選、タイミング、非常に的を射た企画だったと思います。歴史的な視点を踏まえて現在の日本の状況を検証できる設定だったとおもいます。ただ、やはり日本に生活拠点がある人以外の論者の参加があると、外交問題やナショナリズムを語るにしても、もっと肉薄できたかなともおもいます。今後も「いま」を考えるのに役立つフォーラムの企画を期待します。

## 参加動機

何によって知り、参加したか  
(回収アンケート28人分の内訳)

- チラシ…11
- 新聞広告…5
- 知人の紹介…8 (ネット情報によるかどうか)
- 「基金」のホームページ…2
- e-mail 交換…4
- メールリングリスト…6
- インターネット掲示板…7
- インターネット計…19
- その他 大学の掲示

\*新聞広告掲載日(2月26日)前、すでに250人の申し込み(インターネット関連、チラシ)があり、ネット上のPRを中止した。

急ぎよ第2会場を設定し、当日の来場者をあわせて330席以上満席となった。



財団法人女性のためのアジア平和国民基金  
(アジア女性基金)

**ASIAN WOMEN'S FUND**

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

マニユライフプレイス九段南 4 階

<http://www.awf.or.jp>

[info@awf.or.jp](mailto:info@awf.or.jp)